

大正三年度

十年の木の実

櫻楓會員諸子、諸子が母校を離れて初めて社會の一隅に出た時、即ち櫻楓會が初めて芽生へした日から最早今年は十年になるのである。

十年といふ年月は實に早かつた。併しその過去を省みると、實に長い間である。櫻楓會が今日の成長を遂げる途中には容易ならぬ困難があつた。其の困難を通り越して、兎にも角にも今日の成長を遂げた事は、實に涙を以て喜ばねばならぬ。予は諸子と共に悦ばしいのである。否子のみでなく、此の會を生み、此の會を育て指導せられた母校の各教授、並びに評議員諸先輩、殊に直接會員と共に苦心經營せられた櫻楓會補助團員諸氏は、今日、本會が十年記念日を迎ふるの報道を得て共に喜びを祝さるゝであらう。然らば予及び會員諸子は、この祝すべき報道をわれ等の恩人に呈するに當つて、十年の發達進歩は果して如何なる階梯を経て來たか、又今後如何なる階梯に進むべきかを明瞭に示すことが大切であると思ふのである。

然らばこの問題は如何なる材料を蒐めてその研究の材料とするかといふに、云ふ迄もなく會員自身の個々の人格と、其の人

格の間に融合して出來て居る櫻楓會の團體的人格の價值である。これは即ち諸子が十年努力の結果と見るべきものであつて、將來の問題も此の價值如何に依つて定まるものである。即ちこの十年間に作り上げた櫻楓會の精神の基礎は將來永久の進歩發達の基礎となるべきものである。併しながらこの精神的價值はもとより無形のものである。一言一例を以て之を指示することは極めてむづかしい。それ故この問題の具體的材料ともなるべきものは、櫻楓會の活動及び會員各自の日頃の態度如何を眞摯に觀察して、さうして其の價值を極め、其の程度を判定すべきであらうと思ふ。

とは云へ、この判定は容易な業ではない。又今日急いで皮相に走り、淺薄に陥るよりは、その材料となるべきものを提供して、眞實の評價は他日會員各自に於て、或は先輩に於て決定して貰ひたい。畢竟最後の結論は會員自身の人格に俟つの外はないのである。故に予は今茲に、過去十年の櫻楓會の努力した點、即ち進み辿つた道が凡そ如何なる階梯であつたかを省みて、其の研究の材料を提供しようと思ふのである。

櫻楓會が初めて呱呱の聲を擧げた時、諸子が最も集注した點は、個人的精神生活とも云ふべきものに到らんとする努力、所謂自我に徹底せんとする努力であつた。婦人は弱い。感情的であ

る。四圍の境遇に依つて時々刻々に、其の意志を制せらるゝのである。其の弱い意志を鍛鍊して婦人の自我を育てようとする、其所に集注せんとする努力であつた。

第二は人道的精神生活、云ひ換ふれば社會的・道徳的精神生活である。即ち個人の人格と人格の融合、團體と團體の渾一を實現しようとした、理想の團體的生活を作らうと努力集注したのである。以上の階梯を経て第三に到着すべきものは即ち宗教的——宇内的生活である。神又は絶對に向つて自己の渾一融合を自覺しようと努力したのである。

此の三階段の精神生活を諸子はよく經驗し、よく進展したかどうかは今外部の觀察を以て明言することは出来ぬが、兎も角も、それ等の目的を對照に置いて進歩の道を辿つた事は明らかである。面して其れ等の對照は必ずしも空想や迷信ではなかつた事も確である。現實の實生活に足をつけて、常に向上進歩せんとする熱心なる態度はやがて微かながら理想の實現の努力であつた。

そこで第一の階段に於て努力した結果が、諸子の人格の上如何なる實となつて現はれて居るかは、予自身の觀察を以てしても解るのであるが、第二、第三の階段は要素はたしかにあるが、其の各々の個人の經驗と、團體としての經驗とが、どこ迄

併行して進みつゝあるかは最も大なる觀察點であつて、眞の効果として見るべきものであるが、之は先きに述べた様に、たゞ一部分の觀察を以て斷定することは出来ぬ。個々人の進歩階段が各別であるから、表面の淺薄な觀察を以て眞實の結果を見る事は出来ぬのである。要するに會員諸子が自分自身を結定すべきは深い底に根ざした内部の問題と云はねばならぬ。がその反映は日常の人格態度に表るゝものであるから、これを一部の研究材料として參考にすることも誤つた方法ではない。

先づ會員自身が今日迄報告した經驗はどういふものであるかと云ふに、それは二方面に分けることが出来ると思ふ。一は家庭といふ境遇に實現したる人格（自己）と、一は學校其の他社會的活動に於ける自己實現である。予は今この二方面の材料と見るべきものを掲げて見ようと思ふ。

家庭に於ける會員　これは會員よりの報告及び幹部が巡廻して直接目撃したる所の材料によると、先づよい結果と云はねばならぬ。健康状態もよい、結婚率も全會員の七分通りを示してゐるが、これは統計の率で實際はそれ以上である。それ等の家庭を持つた人には、中には随分努力の生活をして居る人もあるが、よくそれ等の困難に堪へ得る健康と精力があると云ふことは何よりの良結果と見る事が出来る。之等の人々は今は最早多

く母となつた人々であるが、その子女の健康も頗る良成績である。殊に母としての責任を盡して遺憾なき様は何れも同じく認めらるゝ所である。

近來婦人が教育を受けて頭腦を勞すると、母となつた時乳の出が悪い。即ち子女を母乳で育てることがだん／＼出来難くなるといふ傾向があるとも傳へられて居るが、これは研究すべき餘地のある問題であるが、まづ櫻楓會員でその統計を見ると、母乳で育てゝ居る人が七分通りあるといふ事である。家庭に於ける經濟、衛生の知識も高等教育を受けた後に初めて其の應用力も養はれて活知識となると云ふことを、會員自身も感謝し又人も認める所である。尚その配偶者の状態はどうであるかと云ふと、多く大學出身者及びそれと同等の程度の教育を受けた人物であるがそれ等の人々よりは好伴侶として認められつゝあるのである。殊に子女の教育を任して省みる必要な迄に満足され信用を受けて居るものが大多數である。

又所謂社會の方面に實現して居る方の努力も認むべきものが多々ある。社會の方面にその力を實現すると云ふことは、さきに所謂三階段の内第二の階段の實現である。第一の階段は慥かに努力の結果を見ることが出来ると云つたが、第二の階段に於ける生活即ち團體の生活が十分に効果を擧げて居るかどうか、

自己の弱點や個人同志の妨げを受けるといふやうな徒勞をすて、即ち消極な努力を抜けて、互に積極的に働けるやうになつて居るかどうか、これも詳細な程度問題の證明は出来ぬが、併し此處にこの社會的生活の價値として見るべき材料は、その母校に對する愛校心、會に對する團結心の強い事である。會員は自己を自覺すると同時に又會の使命を自覺するのである。さうして會が負うて立つ所の責任使命を思ふことは恰も自己を思ふと同じである。この使命を感じ又會を通じて國家社會に盡くさねばならぬといふ小我を離れた自己、擴大される自己といふものが出来て居る。その空氣の中に櫻楓會が存續し、成長して居ると云ふ事は出来ると思ふ。

それは兎も角も十年、非常な戦をして苦しみながらも尙戦ひ、熱心、奮闘心、粘着力を以て今日迄この會を育てゝ來たといふ事は、その社會的精神生活の階段を進めた努力の結果であると云ひ得るものである。予は又前年の七ヶ月間の世界漫遊中に於て、又時々地方巡遊の節に目撃することは櫻楓會員が實際に其の家庭に於て、其の地方に於て及ぼして居る感化力の強い事を思ふのである。

櫻楓會員の到る處、即ち其所に櫻楓會の理想が漸次實現されつゝあることを認むるのである。以上二方面の實例經驗を以

て、直ちに宗教的精神宇宙的に精神に觸れつゝあるものと斷言することは出来ぬ。併し其の要求する所は何れも其の點に向つて居るのである。その信仰を獲得せんとして努力し、其の満足の意味はんとして向上の道を辿りつゝあるのである。これについて本田日生師は嘗て『予は年の三分一は地方巡錫をして居るが其の折に見聞する處の多くの人々の中に、眞に宗教といふ意を解し又その生活をして居るといふ人々は婦人に於ては現今女子大學出の人々である』と話された事がある。予も亦卅年來女子教育に従事した實驗よりいふも、かの迷信を離れ、宗教的偏見を脱して眞に宗教的生命を渴望し居るものは女子大學出身の諸子であると思ふ。

如上の材料に依つて見れば櫻楓會は益々根柢深く健全なる基礎を成しつゝ前進して居るといひ得るのである。けれども、それは光明の一方面を觀察したる言である。

今若し繰つて其の内部の一々を嚴密に取り調べて見ると、會員の總ては今満足しつゝ生活して居るかといふに決してさうではない。それでは満足といふに至らずとも十年前に立てた目的を十年後の今日爲し遂げて居るのかといふと、それも決して満足には出来て居らぬ。其の原因は種々ある。境遇、遺傳、習慣の力は人間をして容易に根本生活に入らしめぬのである。殊に

婦人の缺點は自己感情に陥る事である。一度悪い暗示を受けると勇氣の凡てを失ふのである。そして再び批評を受くる事を恐れ、赤裸々の發表をしなくなるのである。そして自ら自分の世界を狭める。云ひ換ふれば自分を偽り飾ることになるのである。自ら狭い世界に踞踏して生活する結果は従つて寛容なる態度を失ひ、他人に嚴酷に自らに寛容となる。これは婦人の第二の缺點であつて、これがため共同生活の善良なる空氣を作る事が出来ない。婦人の社會的活動に徒勞が多いのはこの爲である。

現今の婦人問題で誰しも遭遇するのは結婚問題(愛の問題)職業問題(パンの問題)であるが、之等に對する婦人の態度は常に受動的か、さもなければ不徹底なる解決を附して自己の弱點に陥つて居る。これ皆その缺點たる利己、偏見の禍である。婦人の特徴といふべき美は變じて醜となり、友愛の情は枯れて孤獨に陥り、他人を疑ひ、他人の好意に反對し、不平不満の生活に死するのである。婦人が進んで積極的に自ら信じ、又他人を信じ、團體を信じて、その力を遠慮なく發揮することが出来たならば其所に光明を認めることが出来るのであるが、惜しい事である。

此れ等の缺點を去るには、矢張り第一階段の修養に徹底しな

ければならぬ。この個人的精神生活に徹底すれば、社會的精神生活にも宗教的精神生活にも到達することが出来るのである。併し個人的精神生活にも境遇、習慣、遺傳の關係を離れることは出来ない。この妨げを除いて自己を擴大して行かうとするには、先づ會員自身がもう一つ奮起せねばならぬ。さうして自分で良境遇を開くのである。自己の修養法を見出してこれを友人に匡し、世間に問ひ、惹いては之を國家、人道に表す興味と活動が伴はねばならぬ。第二には櫻楓會が相互に理解ある同情ある態度を以て、消極的徒勞を省き、相互積極的活動を相扶けて進む良境遇を作るといふ事が目下の急務である。

此の努力とこの境遇に依つて初めて其所に天籟の聲を聞き、與へられたる使命を見出すのである。即ち宗教生活に入るのである。一つの偉大なる王國を建設するには各自の小我を捨て、一致共同する所に努力の價值があるのである。

櫻楓會十年の記念は斯くの如き意味を以て記念したい。十年間の會員及び櫻楓會の經驗材料に依つて、慥かに其所に第二の發展を望むことが出来ると思ふのである。

會員諸子よ、諸子は既に自ら天職とすべきものを見出せしや否や、若し未だその階段に到らざるものあらば、自ら努力せよ。而して其れ等の人に良境遇を與へ、良友となるべきは櫻楓

會である。櫻楓會員は一人残らず各自に天職を見出さしめ各自其の處を得て活動せしめねばならぬ。家庭に在つて、又は社會に立ちての各自の人格の反映は即ち櫻楓會の反映である。櫻楓會の團體的人格の價值に結論をつけるものは、會員諸子の自我實現、自我擴大に俟つのである。

諸子は十年記念を期して眠りたるは醒め、醒めたるは進むべき決心をつけて貰ひたい、予は此の希望を以て、十年記念の辭に代ふるものである。

〔花紅葉〕第十三號 大正三年四月

皇太后陛下の御坤徳を追仰し奉りて

恐懼、哀悼、はた如何なる言葉を以てか、われ等今日の哀愁の心を表し得べきものでありませう、今ははや幽明遠く神去り玉ひし我が

皇太后陛下は、畏くも沼津の行宮に在して、三月廿六日俄かに玉體御不豫に渡らせられ、引き續き御加養被遊て旬餘日に亘り、漸次御輕快に向はせらるゝ御事と拜承して、我れ等臣子は、天地の神に祈つてはや一日も御全癒の日速かれと待ち奉つて居りました、然るに、四月九日再び劇烈なる狭心症を發させ

られ、十日東京青山の御所に還啓あらせられて、十一日午前二時十分遂に崩御の御報に接し奉るの止むなきに至りました。

乾坤並び輝かせ玉ふ

われ等臣子は、今恐懼哀悼の胸をおさへて、靜かに陛下の御坤徳を仰ぎ奉るのであります。即ち陛下の御遺徳を追仰し奉つて、臣子我れ等の爲すべき道を深く考へたいと思ひます。

あやにかしこき陛下は大明治天皇即位の御始めより、乾坤並び輝かせ玉うて、外には國威の發揚に大御心を傾けさせ玉ひ、かの維新の御偉業の御内助の御偉功を積ませ玉ひ、内にはわが日本帝國の蒼生の御母として撫で慈しみ導き玉ひし事は申すも畏き次第であります。

誰れか賢婦に遭ひしか

この帝國の一大家族の國母陛下として仰ぎ奉る、わが陛下は、懼れながらその御偉風はあつばれ賢婦の範を垂れ給ふたのであります。

陛下が事に當らせられて、御意志の力の御堅固に渡らせ玉ふことを拜し奉るのは申すも畏き極みでありますが、その一端を仰ぎ奉れば、嘗て

大明治天皇陛下に伴はせられて京都を御巡遊あらせられし時も、聖上の御あとに從はせられて玉歩を運ばせ玉ふ御有様の、いかにも御女性の陛下には御困難にあらせられずやと恐察するものもあつたと申しますが、陛下は常に聖上の御後に扈從遊ばされて、さる御疲れの色は露程も御あらはし遊ばされず、殊に其の御途中に於て、淺い小河に御かゝり遊ばされた時、聖上は逸早く御飛び越え遊ばされましたが、陛下は、さすがに御女性の、それは遊ばされずして、畏くも玉歩を小河の水に浸し給ひながら御裳のぬるゝも省み給はずして御あとに從ひ玉ひ、かりそめにもかゝる事に聖上の御かへりみさせ玉ふをはゞからせ玉ふ御有様を仰ぎ奉り豫ねて御意志の強く渡らせらるゝをかゝる事にも拜し奉りて恐懼に堪へなかつたと申す事でありませぬ。

陛下は常に健全なる精神は健康なる身體に宿ると云ふ御信念もて即ち強健なる國民養成に御心を注がせ玉うて、先づ華族女學校の生徒に運動を御奨勵遊ばされ、貴族の姫君にも體育の重んずべきを教へさせられ玉ふた、其の他御日常御詠み遊ばさるゝ御歌を拜し奉りて、如何に國母陛下が先づ御自ら其の範を示し玉ひて賢婦養成に御心を注がせ玉ひしかは屢々拜承し奉る處であります。

率先して改善の實を擧げ玉ふ

一度大御心を改善進歩の道に注がせ玉へば、先づ御自ら率先して御實行遊ばされ、かの維新の際に泰西の文明が急に輸入せられ、例へば御服なども洋装を以て禮服と定めさせられた御時なども、一般の婦人は未だ容易に舊習を捨て、進んで改むべき決斷の出来なかつた時、畏くも、陛下は先御自ら率先して御服を洋服に御改め遊ばされ、その長所を示して改善の實を擧げさせ玉うたのであります。其の他泰西の萬物、善を輸入し陋習を改め遊ばさるる上に少しも御躊躇遊ばさるゝが如き事はつゆあらせられなかつたと拜承する所であります。而も我が國從來の女徳を御遵奉遊されて御貞徳の譽れいや高きは諸外國の人々迄も欽仰し奉る處であります。

更に外交の徳に於かせられては、謁見を賜はりたる外國使臣のはしゝまでも、其の御徳を敬慕し奉らぬものはないのであります。かゝる御徳は國母陛下の尊き御徳にて在らせらるゝが爲めと申し奉るばかりでなく、畏けれど其の御人格の世にたぐひなき御賢婦に渡らせらるゝ御徳の然らしむる所であります。

洵に、仰ぎてもゝ極みなきは御仁慈の御徳であります。病者を勞はり貧しきを恤ませ玉ひ、かの赤十字、愛國婦人會の事

業を獎勵し玉ひ、其の他廢兵院、養育院等屢々御手許金を以て恤ませ玉ひしことは萬人の汎く知る處であります。又養蠶の事を御獎勵被遊て、玉の御手に御自ら其の業をせさせ玉ふなど、數へ上げ奉れば數限りもない事であります。

殊に又女子の教育に大御心を注がせ玉うて、御直接には華族女學校を創めさせ玉ひ、又先年女子高等師範學校へ御行啓被遊て學事御獎勵の御事ありしは、何人も叡慮の深きに在るを感佩する所であります。殊にわれ等の感激して須臾も忘る能はざるは、我が日本女子大學校に去る明治卅四年九月廿五日、時の皇后宮大夫香川子爵及び岩倉公爵を御遣し被遊、本校の主義方針及び現状を委しく聞し召されて、特に陛下の思召を以て金二千圓御下賜の有難き御沙汰を蒙つた事であります。この御獎勵の思召は實にわが日本女子大學の光榮に止らず、廣く女子高等教育の前途に多大なる御感化を垂れさせ玉ふたのであります。

かく慈善に教育に大御心をそゝがせ玉ふ陛下には、御日常の事々に御自らの御修養つゆ怠らせ給はず、嘗て
白妙の衣の塵は拂へども

憂きは心のくもりなりけり

と云ふ御歌を詠ませ玉ひて、日夜に御信念厚く御修養被遊ました。畏くも陛下におかせられては、明治天皇御登遐の御悲しみ

未だ御薄らぎの御いとまさへあらせられざるに、今日のわが國

情は陛下の大御心を如何ばかり痛め奉つた事でありませう、たゞ／＼恐懼に堪へぬ所でありませう。延いては畏れれど御親子

の御中にてあらせらるゝ、今上兩陛下の御宸襟は如何ばかりにあらせらるゝ御事でありませう、たゞ／＼恐懼の極みに堪へま

せぬ、此の際吾々臣民は上聖上の御宸襟を安じ奉り、皇太后の御遺志を體して奮起益々努力しなければならませぬ。只憂懼徒

に過去の追想に心を碎て爲す所なきは叡慮に答へ奉る道ではないのであります。憂ふべき多事なる國情は恰もこれ第二維新の

生れんとする前兆であります。屢々云ふ所であります、明治第一維新は外形上政治上の改革でありましたが、大正維新は思

想の改善を爲すべき時機に到來して居るのであります。即偉なる浪の本には偉大なる力が動いて居るのであります。根本の改

革とは即ちこの大なる浪の原動力の改善であります。國家を成して居る各細胞即ち國民の改善であります。國民の思想の眞髓

に徹底したる意志の教育——人格の改善に俟たなければならませぬ、今悲愁に閉せられたるわれ等國民は老幼男女を問はず、奮

起して共同一致し、此の國家の大々の使命に向つて倒れて後止むの決心を以て各自の任務を盡くさねばならませぬ、これ即ち

皇太后陛下の御恩澤、御遺志に酬い奉る所以のものであるとい

ふ事を深く感じ奉るのであります。

〔家庭週報〕第二百六十七號 大正三年四月

女子大學創立の由來

今日は本校創立第十三回記念式に當るのであります、此の

機會に於て、此の日本女子大學校の生れてから今日までに育て

上げる事に十數年間日夜心をそそがれ、又他人には分らぬ所に

於て種々の心配と深い同情を以つて、十年一日の如く其の柱礎

となつて盡力下さつた人々の御厚意に對し、深い感謝の意を表

します。

それで今日の式に於て此の十年間の歴史の意義あるところ

と、多數の同情者の眞意とを感銘することは極めて大切な事と

思ひます。

皆様の中には始めて此の記念式に列なつた方もありませうが

如何にして此の女子大學が今日まで成長發達したか、其の事實

をお話したならば、其處に深い意味のあることが解ることゝ思

ひます。

此の女子大學が我が日本帝國の中に設立しなければならぬと

云ひ出されてから二十年になります。當時内閣總理大臣として

政治上から國家の使命を考へて居られました伊藤博文公が教育にも亦非常に熱心なる意見を持たれて、丁度私が外國から帰りました翌日、大臣の官舎に於て此の女子大學の創立の相談をいたしました。

その時伊藤公は先づその設立地の事について考へられました、東京にはあまり總てのものが集つて了ふ傾きがあるから、むしろ女子大學は關西に置きたいと云ふ御意見であつた。

そこで此の伊藤公の意見に基いて、他の人々の意見もきき、結局は舊と私が設立した大阪梅花女學校を以つて基礎となし、之を發達させて、ゆく／＼は此の梅花女學校を大學にする計畫を立てたのであります。

それで大阪の廣岡淺子夫人、大和の土倉庄三郎氏等は卒先して多大の盡力をして下さいまして、又其の他の人々の斡旋に依り、大阪城の北側に當る高燥なる地を求めて、(即ち今の清水谷女學校所在地) 此所に設立する心算でありました。然しその後教育上の立場から見て先づ第一に東京に創設する方が順序である、と云ふ意見が出まして、多數がその方に傾きましたので、遂に現在の校舎が設立されることになつたのであります。

さて記憶すべき事は其の設立當時の會合であつて只今本校の評議員である大隈伯は其の時外務大臣でありましたが、その外

務大臣官舎で、實に十七年以前の本月本日第一回の發起人會を開きました。其の時一番先きに出席されました方は岩崎男爵でありました。續いて總理でありました。松方伯、それから近衛公等天下第一流の名士が相集つて各自の意見を發表して大いに論議するところがあつた。その議論沸騰した主なる原因は二つの疑問があつたからで、其の疑問とは女子に高等教育を授けることは、果して弊害がないか、又今日の日本の状態に於て、女子高等教育の必要があるかと云ふ事でありました。實に此の時の議論は非常に熱烈であつて、殆ど議が破れるかと思はれる程でありました。廣岡夫人の如きは辯論最も努められたのであります。

然し其の後追々に多數の有力なる同情者に依つて遂にその目的は達せられた、殊に森村翁、澁澤男の熱心が與つて多きに在るのであります。

次で明治三十七年事業擴張に關する評議員の相談會がありましたが、この時の會合に於ける熱心誠實の精神の燃え立つた有様は到底常一様の事務的相談會の如きものではない。全く宗教のリバイバルのやうな光景を呈したことは、其の時列席して居つて、感激の情に堪へず、後に其の感想を書き送つた塘幹事の書翰にも現はれて居るのであります。此の書翰は公にすべき性

質のものではないが、今日は内わだけの會合であるから當時の光景を知る爲に朗讀して見ませう。(書翰略)

斯ういふやうな有様で以上に名を申した外に西園寺侯、大隈伯、三井、住友、其の他諸子等の十年一日の如く深き同情と多額の資金を寄せられて自家の事業として、協力一致以つて本校發達に力められましたその結果今日に及びましたので、今日此の學校が斯の如くに發達し、世間にも認められ、あなた方も要求する教育を受けることの出来るやうになりましたのは、決して一朝一夕の間に容易なことで出来たものではない、既に述べました通り幾多の貴い犠牲が拂はれて我が日本女子大學は生れたのであります。

今日は此の校舎には開校式を舉げてから滿十三年の記念日に當るのでかゝる記念すべき日に於いて過去の精神と努力とを偲び、また意義ある本校の歴史を偲ぶと共に、本校の創立及び經營に盡力下された方々に對し深く感謝を捧げなければならぬのであります。同時に又是に依つて覺悟を新にして、過去の精神と犠牲の價値とを我々の將來の發達進歩の上に復活させるやうに、極力勉強し且つ此の學校其のものを益々改善して、教育的生命の充實緊張を計り、帝國の婦人の人格開發培養に一動力となるに力めることは、實に今後に於ける我々の責任であるの

であります。

〔「家庭週報」第二百六十九號・創立記念式上に於て〕

大正三年五月

學生の暑中休暇

此の學年の始めに於て、吾々は火のバプテスマを受けたのである。再び此の講堂に入るには、生れ更つて新たなる人とならねばならぬと考へて居つたが、今日此の處に終業式を行ふに當り、吾々は此の一學期間果してどれほどの進歩をしたであらうか、どれほど新しいものを加へたであらうか、といふことを考へるのである。

只今小學校の方の報告に依ると、小さいながらも、又幼稚ではあるけれども、自動的に何か工夫するところがあつた。即ち自分達で創作した、カードシステムの書き方に依つて、如何に自動的に修養して居るかと云ふ事が分るのである。そして善い行ひと悪い行ひとを符號に依つて表すやうになつて居るが、近頃は大變進んで來て、先生や父母の言ひつけを守るやうになつたと云ふ結果が見える。誠に愉快である。

高等女學校及び大學部の方は、昨日の報告によつてほとん

のであるが、高等女學校の方は、その報告に依れば、活動の自由を得たといふ事である。自由の精神、即ち他より動かさるゝにあらざして、自動的に自己の本務を盡すに至るところの、その自由はまことにいゝ事である。然し少しでも我が儘といふことが交つて居つてはならぬ。人の精神を束縛するものは、習慣や風俗や傳説や外部的のものばかりではない。虚榮や嫉妬や怠惰や我が儘や、内部的の束縛が強いのである。此等の束縛より脱しなければ眞の自由活動の境に達したとはいへないのであるから、その自由の意味を眞に解して、わがまゝと混同する事なく、尙一層此の夏休みの中に反省し實行してほしいのである。

次に大學部の方はその報告によつて此の學期に進まれたところを認めるが、然しその深淺は果していかなる程度迄いつて居るであらうか。兎も角此の學期の始めに、進むべき目的を立て、出來得るだけの事を努めて來られたと云ふことはたしかな事である。

私がこゝに持つて來た此の八ツ手の葉は、私の家の庭に繁つたものであるが、大きい葉も小さい葉も、同じ木の同じ幹に出たもので、何故こんな差があるかといふことは實に一考しなければならぬ。これは全く境遇に依つてかゝる差異が

生じたもので、先天的には同じ可能力を備へて居つたのであるが、日蔭で十分發育する事の出來ない部分の葉は小さく貧弱であつて、一方光線も十分に取り、滋養分も澤山なところの葉は、こんなに大きく立派に成長して居るのである。人間も此の八ツ手の葉と同じく、各自が皆同じ可能力、即ち自發力を有して居るけれどもその境遇如何に依りて、自發力を十分働かせる与否に依り、非常に其の發達の程度に差が生じて來るのである。

人間は始終その心の中に何かクリエートするところがなければならぬ。絶えず進歩してゆくものがないければならぬ。これがないければ眞に生きたる人生の意義がないのである。此の十分發育した八ツ手の葉を見ると實に愉快である。

此の間學監の宅にて、某氏の發明せる漢字のタイプライターの實驗とその説明を聞いたが、某氏が此の發明を工夫しかけたのは十年以前であつて、始めて機械の製作に着手したのは三年前である。此の頃に至つて漸く實用に供する自信を有する程度まで進んだのである。其の間の苦心や研究は容易の業ではなかつたのである。

又此の頃帝國學士院にて醫學上や理學上の發見發明に對する授賞式があつた。私も之に参列して、我が國に於てもかく學術

上の發見發明を見るに至つた國民の創始力の勃興して來たことを、非常に愉快に感じたのである。

斯くの如く、發見力、創始力を養うて行くことは國家の進歩文明の進歩に必要であることはいふまでもないことであるが、漸次進歩してゆくにも、このクリエーターパワーの必要なることは同じ事である。そして此の力を養ふには先づ境遇空氣を作らねばならぬ。即ち自發力を十分に發起し、活動せしむるところの境遇を作らねばならぬ。諸子が此の學年の標語として、活動の自由といふことを掲げたのは、此の精神に外ならぬのである。此の學期に於て、この自由の空氣を作るために、美といふこと、趣味を養ふといふことを努められ、そして幾分の成績を擧げられた事は吾々の認めて喜ぶところである。其の一例を云へば、過日體育係で催された競技會の有様を見て、英文科の英語の會の有様を見て分るのである。又寮舎で毎朝深呼吸をしたり、黙想をしたり、唱歌をうたつたり、色々の運動をせられて居る有様を見ても、多少の進歩を認められるのである。その中に自らオリジナリティーがあり、クリエーターのところも見える。諸子は十分精神をこめ、力を盡くしてこゝまで進まれたのであるが、まだくハツ手の葉の萌芽である。十分發育して大いなる葉となるや否やは、來らんとする第二、第三の學

期を待たねばならぬと思ふのである。希くは此の夏休みの間に於て心身の元氣をクリエートせられて、歸來一層の努力を望むのである。

〔家庭週報〕第二百八十號・第一學期終業式にて

大正三年七月

婦人と宗教的生活

妄信迷信のみ多し

人間の生活には物質的方面と精神的方面との二つがある。而して精神的生活は物質的生活に比べて、より高尚なること、多くの點に於て明かな事實である。尠くとも精神的向上を理想とする生活が眞實の生き甲斐ある生活の如く我々には思はるゝのである。然るに從來の婦人の多數は、精神の方面よりも物質の方面にのみ生きて行かうとして居る。彼等は目で見、耳で聴き、口で味ふ、感覺的の生活、我々の周圍の表面に現はれる生活の以外に、心の中の高遠なる生活、分裂せんとする生を統一して、目的と價值とを有する理想に向つて生きて行くなどいふことは、幾ら説明しても婦人の頭腦に入らない程、縁遠く掛け離れた、物質的な感覺的な生活のみをなして來たのである。

而して、精神生活とは、言ひ換へれば宗教生活に外ならない。何となれば眞の宗教とは宗派や教會や教義を超越して存在する、直ちに我々の生命全體を導いて行くところの吾々以上の理想的實體を認めて、それによつて全生涯を送つて行くことに外ならない。然るに従來の婦人には、こんな宗教的生活を要求した者が極めて乏しかつた。此の種の理想や信仰や精神生活を行つた者は、我邦には皆無と言つて差支がないかも知れない。

斯う言へば或る人は問ふであらう、我國は實に宗教を信ずる婦人が多い、眞宗、日蓮宗、天理教等の大宗教は悉く婦人が其の主なる信者ではないか、彼等は家財を盡し一身を賭しても信仰を枉げない熱烈な婦人ではないかと。如何にも斯かる信徒の熱心は非常なものであつて、且つそれは賞讃すべきであるかも知れない。然しながら彼等の信仰は、果して私の所謂宗教的信仰であらうか、精神的な生活であらうか。今彼等の信ずる動機や信ずる態度についてこれを見るに、或者は神佛を信ずれば病氣が癒つた、又は癒るといふので信仰する、又或る者は一身の利得の爲めに信仰する、従つてそれ等は、日常生活の手段でこそあれ、第一義的に吾々を統一して導いて行く眞の宗教生活、精神生活と認めることはできない。婦人間に妄信とか迷信とか言ふべき信仰の意外に多くて詰らぬ生活をやつて居るのを見ると

共に、眞の宗教的又は精神的な生活を行つて居る婦人の極めて少ないのを遺憾に思つてゐる。

時代は宗教を要求す

されど時勢は何時までも停滞して居るものではない。社會の進歩と共に、婦人の妄信も漸次開發せられて、眞の宗教的生活を要求する時代は正に來りつゝある。これから人間生活は多くの哲學者や宗教家の言つて居るやうに、一層物質生活よりも精神生活に進んで行く、殊にこれまで精神生活の方面に缺けて居た婦人はどうしても、もう二層も三層も精神生活に入つて行かねばならなくなつて居る。けれども事實は未だ一般にそこまで行つては居ない。一年の殆んど三分の二は、地方傳道に費して居らるゝ本田日生氏は、此間も斯う言はれた。まだ、ほんたうに生き效ある生活をやらうと自覺して、深い眞面目な心を持つて居る婦人は極めて尠い、一縣に一人か二人位なものである。その一二人も大抵大學の卒業生であると語られた。私の學校では、特に精神生活、宗教的自覺に重きを置いて居るから、幸ひにして斯んな結果になつて居るのは喜ばしいことであるが、一般から言ふと尙ほ甚だ憂ふべき状態に居るのである。見よ、多數の婦人は、美しい衣服や化粧に浮身を襲して一日の大部分を空し

くする暇はあれど、一冊の精神修養に益ある書物を開かうとはしない。又演劇や活動に行つて淺薄な感情の満足をしやうとする者はあつても、教會なり講演會なりに出で、心の糧を取らうなど、は思つても見ないのである。然しこれは何時までも續くことではない。今の思想界の状態や、婦人界の動搖を少し考へたなら、婦人は一日も早く精神生活の高尙なることを解して、價値ある宗教信仰に入らねばならないと思ふ。そしてさうするには先づ婦人の地位を自覺して、婦人と宗教との關係を十分に考へて見なければならぬ。

今の時代は、人の思想の最も危険な状態となつて居る時である。基督教とか佛教とか神道とかも、是迄の如き儀式一點張のものでは満足が出来なくなり、といつて科學萬能の夢も醒めて、神祕とか運命とか精神修養とか言ふものはどうしても宗教的信仰に頼らねば安心立命が得られなくなつて、しかも未だそれ等現代の人々を安心させるやうな宗教も信仰も精神の統一點も發見されないで、全く萬人同様に其の歸するところに迷つて居る有様である。従つて社會の上にも何一つの標準となり基本となるものがなくて、其の日暮しをのみやつて居るのであるから、罪惡觀念等もなくなつて、あの通り到る所で驚くべき犯罪が行はれて居るのである。昔は宗教信仰だとか五倫五常の道

だとかを信じて、人の心の行く道は明かであつたのに、今では何事にも權威を認めず、出來心次第で我儘勝手に振舞つて居るのである。實にこんな危険は又とないのである。

信仰ある婦人

斯く社會人心の迷つて居る一方、婦人は世開け教育普及するに従つて次第に自覺して、婦人も人間として生活を營まうとするやうになつたが、しかも思想界の傾向が上の如くであるから、所謂自覺した婦人達は、動もすれば輕薄な、虚榮と驕慢に満ちた美しい蛇のやうな女にのみなりたがつて、現世を超越し、感覺の欲を離れて永遠の理想に活きやうとする點が缺けて來たのは止むを得ない事なのである。そして此危険な、墮落せんとする婦人を救ふたゞ一つの方法は、確乎たる信念を持つことである。精神修養を積んで眞の人間として、又婦人としての使命を盡さんとする意義を悟ることなのである。

殊に婦人はどうしても家庭の中堅となつて、一家の平和を保ち、夫を助け、子女を教育して行かねばならない大責任がある。そして此家庭の主婦としての任務は、從來の如く臺所や裁縫の仕事ではなく、精神的に一家を持つて行くことが今後の主な仕事となるのである。主婦に確固たる信念がありさへしたな

ら、家族の間も圓滿に行かうし、一家の經濟も故障がないであらう、のみならず何よりも大切な子女の精神教育に大なる感化を與へるものは母である、小楠公の母やワシントンの母や、リンコルの母や孟子の母や、皆賢母として精神的に家庭教育を行つたものである。次に此の信仰があれば、突然の災難に遇つたり境遇の變化にぶつかつても、びくともせず落ちついてそれに當ることが出来るのである。

たゞ呉々も言つて置きたいのは、こんな信仰は決して病氣を癒す爲めの手段や、金を儲けるための方便ではなくて、自發に心の中にインスピレーションに感應して生じた精神的な力でなければならぬ。お太鼓叩いてお題目を唱へたり、教會に集まつて讚美歌を歌つたりすることを信仰だと思ふと、とんだ間違が生じる。こんな宗教は現代の生活から死んで居ることを忘れないやうに。

宗教的的使命

次に婦人の使命と宗教について一言して置かう。昨年歐米漫遊に際し、私は到る所で婦人が盛に新しい宗教上の活動なり運動なりをして居るのを見た。或る人は、今後世界の文明が今一段の進歩をすると、婦人の地位は今より更に一段も二段も高

くなり、従つて婦人の仕事も男子の仕事と全く同じ程度と認めらるゝに至り、宗教上の能力も男子と變らなくなるだらうと語つた。

實際外國に於ける、婦人の宗教的自覺は目ざましいものがある。近頃宗教界で有名な出來事に「セオソフイスト」といふ新教派の運動がある。これはバラバスクと呼ぶ露西亞の若い婦人によつて唱へられ東歐近東から印度へかけて、忽ち數十萬の進歩した信者を集め得た。不幸にしてバラバスクは西藏チベットに入つて迫害を蒙り遂に殺されてしまつたが、其の教義は今や歐米全洲に蔓延し、且つ、米國でも英國でも、其の先覺者リヂャとなつて居るのは婦人である。

又英國にはクリスチヤン、サイエンスといふ基督教の新派があつて、これも若い人達の間に仲々評判がよいのであるが、その開祖もエヂーといふ婦人なのである。其他伊太利のモンテツソリー夫人の如き、純然たる宗教家でもなければ、宗教運動にも與つて居ないが、新しい教育家、教育思想家として、一世紀前にベスタロツチなどといふ男子のやつた事を行つて、更に遜色がないのである。其の他宗教類似の、動物虐待防止についても、兒童保護についても、宗教的信仰の確乎たることに基いて行はれて居る公共事業等は頗る多いのである。

然しながら日本婦人にはこれだけの大きい期待はまだされな
いが、若し眞に精神生活の貴重なことを知つて、人間として婦
人として生き甲斐ある生活をしやうとするならば、先づ信仰の
何物たるかをよく研究して、心の内から出た光として、そ
の光明の中に輝やいて行かねばならぬ。そして家庭の主婦な
り、又個人なりの完全な人格を築き上げると共に、社會の爲
め、一般の人類の爲めに働くべき使命を盡さねばならぬ。

所が婦人に取つて最も適當な宗教的使命に、慈善事業といふ
事がある。婦人は宗教的信仰を得ると共に、これを外に發表し
て慈善事業の爲め大に盡さねばならない。貧民救助、冤囚保
護、賤業婦解放、不良少年感化、盲啞教育、幼老養育、肺癩療
養等、慈善の急を要する事業は到る所にあるのだから、心ある
婦人は大に是等の點に注目し、生き効ある精神生活を續けて行
きたいものである。(談話)

〔婦人評論〕第三卷第十五號 大正三年八月

女子と宗教

婦人に宗教心ありや

今茲に特に女子と宗教心と題したのは、近頃盛んに論及せら
るゝ宗教問題が、婦人の頭腦、精神には如何やうに解せられて
居るであらうか、即ち

一、婦人に宗教心ありや。

二、又、婦人にも宗教心ありとすれば、如何なる程度迄發達

し又今後如何に發展すべきか。

三、然らば婦人は宗教界に對して如何なる意義、如何なる使

命を有するか。

といふに在るのである。

宗教とは何

以上の問題に入るには其の前に一言、宗教とは何であるか、
殊に、宗教の本質、根本義は何であるか、といふ説明をしなけ
ればならぬと思ふ。

宗教といふことを大體二つの方面から見る事が出来る。即ち
第一を本質、第二を形式とする。今茲に私が宗教といふのは主

にその本質即ち生命及び其の生活の價値をいふのである。然らば生とは何であるかといふに、これは即ち人間の生活の價値を認識する神といふ觀念である。神とは即ち今此所に在るものでなくてはならぬ。遠方にあるもの、昔あつたものをいふのではない。今此所に在るもの、我と共に働いて居るもの、我自身が直ちに見て居るもの、その神をいふのである。

ホイットマンの詩に、『吾々の生きて居る毎日——廿四時間中吾々は神の或ものを必ず觀て居る。鏡に映じて居る人の顔にも、自分の顔にも、凡ての人々の顔に神は現れて居る、それ故吾々は何時如何なる處にも直ちに神を觀る事が出来る。』

といつて居る。神の署名ある神の手紙は到る處に落ちて居る。故に我等が神より受くる天啓は常に時間正しく刻々に與へられて居るのである。故に若し自分がそれを歓迎し、受け入るゝ精神態度になりさへすれば、何處にも神と我と相會することが出来るのである。神と我と直接に交通することが出来るのである。

神格の要素

さて、その神格 (divineness) と云ふものには幾つもの要素があるが、美はその一つである。人間は高尚なる美を要求す

る、これが人間の向上心である。その求むる心情が即ち宗教である。又愛は神格の一要素である。愛は即ち人間の宗教的生活の表現であるといふ事が出来る。眞愛に徹底せんとする人間の要求は、即ち眞理を追求する事となり、その眞の愛を創造する事となる。即ち眞の宗教的生活を創むるのである。茲に又一言注釋して置かねばならぬ事は、宗教といふ事を或場合には宗派と解する人のある事である。また經典である、儀式であると考へる事であるが、其れは宗教の體現である處の形式に過ぎないものであることを明らかにして置きたい。形式は宗教の本質ではない。宗教の本質を體現する爲に必要であつた宗教の形式は、本質と伴つてこそ、その宗教の生命がある。けれども本質を失つた形骸のみは何の意味をも爲さないものである。我等はその本質を見出し、宗教の本義を得たいと思ふのである。

聖書の中には尊い言葉がある。かの奇蹟は悉く神の眞筆であるから一字一句尊いと云つて、其の文字經典を絶対眞理として、排斥的狹隘なる信條を固持するのは宗教の形骸を尊奉するので、生きたる生活の中に神を見出す事の出来ぬ人々である。十九世紀に起つたアグネスチック (不可思議論) も其の爲に起つたのであるが、併し今日はそれもはや活社會からは葬り去られてゐる。宗教の中心目的となり、本質となるものは活きたる

神である。故に今在るものである。現在交通の出来るものである。神は何時も活動して進化して居るものである。この眞理を見出したものは進化論である。

創設的進化論

昔は神が六日の間に此の世界を完成したと云つた。けれども、今日の考では、今の瞬間々々に創設しつゝあると云ふのである。この信仰を持つて居る諸家の説を左に掲げてこの創設進化論の内容の参照としようと思ふ。

シユライエル・マツヘル（獨逸の哲學者）曰く、『宗教の本質は直感と感情（或は心情）である。宗教は宇宙を直感せんとし、宇宙に特有なる表現と行爲とにより之を理想的に窺ひ知らんとして居るものである。故に無邪氣なる小兒の如き受動性を持つて宇宙直接の影響により捕へられ、又充實せられ行くものである』

故に宗教とは、人間が神の實在を直感せんとするものである。さうして、實在は我々に直感することの出来るやうに働きかくるものであり、又人格は直感することの出来る力を與へられて居るのである。

シヨーペンハウエル、ゼームス、ベルグソンなどは之を意志

の活きとして居る。其の意志を指してベルグソンは流動と云ひ、精神力の活動と云ふ。又オイケンは精神的生活というて居る。

ホフヂングは、『宗教の本質は價値の保存を確信する事である』と。

即ち宗教とは、何か人生の價値を己の経験に依つて發見するものである。故に未來の價値の保存を信するならば先づ今日の生活に於て経験せねばならぬ。故に宗教の内容は各々自分が價値を味うた経験に基かねばならぬ。そこで、その價値を今経験しつゝ進まなければ、その宗教といふものは誠に精神力の程度の幼稚なるものである。

併し、又宗教といふものは最初から凡ての價値を創設するものでないといふ事も、凡ての人々の承認する處である。唯永久に限りなく價値を創設して止まぬ向上心、之が即ち宗教心である。さうして此處に云ふ永久とは、此の價値ある現在に在つて直ちに永久的生活を營むことが眞の永久不滅の生命となるべきものであると云ふのである。

ビシヨツプ・クライトンは『宗教的生活の全體は關係である。即ち神祕的、家庭的、社會的、國家的天國の如き理想的關係である』と云つて居る。

即ち人格と人格と融合せる家庭社會國家である。又東洋の哲理、佛教の涅槃といふ事に就いて考へると、宗教は涅槃に入る経験である。現在の罪惡と煩悶とを排除して、眞に涅槃に入つて、全く佛陀に融合することである。

以上の諸大家の説を分類して見ると三方面或は三階段として考へる事が出来ると思ふ。

宗教生活の三階段

前講に於て、宗教的精神の向上的階段或は方面とも云ふべきものは、三つに分つ事が出来ると云つた。その

第一は、自我に徹底する生活、先づ自覺するといふことである。

第二は、自我を社會的に擴充する生活、即ち人格と人格との融合である。

第三は、自我を宇宙的に向上し、歴史的に發展する生活である。右の第一の問題に對して

シユライエル・マツヘルは『宗教は一層鋭くされし感情と、一層精練されたる判斷とを以て、人格の全範圍を通じて此の漂浪の境界より根本我に歸り來り、凡ての價値を自身の内に見出さんとする靈感又は天啓である』

と云つて居る。即ち自我に徹底する経験である。宗教の最初の階段はその肉體の欲望を抑へ、最も神聖な精神界の空氣の中に生活しようとする経験即ち神祕主義、又形而上の生活である。禁慾難行の生活経験である。かの婆羅門教の如きはこの適例である。その凡ての目的は自我を完成し自我を徹底せんとするのである。そこでその理想的至善至極の生活といふは *Impossibile* である。故にこの主義は一面隱遁主義となるの止むを得ないのである。先づ内に自己徹底をするには、晦まされ易き自分を惑はされ易い社會から遠ざけねばならぬ。かの釋尊の隱遁、雪山苦行もその經驗を行はれたのである。又基督教にも次ぎのやうな事が云つてある。『天國に入るは針の穴を通るよりも難事である。故に親兄弟妻子珍寶凡てを打棄てねばならぬ』と説いてある。

其の他昔から宗教には斷食といふ事がある。又種々の苦行があるが、それは皆自己を絶對的完全なものにしよう、凡ての宇宙の價値を自我に表現しようといふ目的の爲に禁慾隱遁もせねばならぬのである。けれども今日は、必ずしもこの隱遁主義、禁慾主義をとらずとも、人間の意志を以て自制自定することが出来るといひ得るのである。此の信仰を改善主義ともいふので、此迄の宿命論に屬するものゝ如き其の靈性の發達を劃する

やうな道ではない。消極的である。惑はさるゝ事を恐れて隠遁するよりも、自ら自分の意志を以て自らの境遇及び私慾に勝つて行かねばならぬ、自己は一種の靈性であることを自覺するのである。即ち眞に宗教生活の第一歩に入るのである。それには先づどうしても自我に徹底しなければならぬ。神より受けた靈性が人格の先天的核心であつて、永遠不朽の生命である事を自覺し、その靈性が各自に發展し、自由に人格を完成して行く所の生活を營むのである。此の力をベルグソン其の他今日の進んだ思想家は自由意志と名づけて居る。又其の活動を改善主義と云うて居る。即ち他力に支配さるゝ境遇遺傳或は運命と云ふが如きものに支配されず、自動的に自ら自分の運命を開拓するのである。云ひ換ふれば他人の人格の中に吸ひ取られざる確たる自我を持つて立つのである。他と融合はしても其の本質を失はざるところの自我即ち *divine nature* の存することを信ずるものである。即ち多元論の主張である。宗教の第一根柢は即ちこの自覺といふ人生の第一誕生を味ふことである。

女性と自覺

さてそこで再び女性問題に就いて考へねばならぬ所に到着したが、抑も女性といふ人間は此の宗教心の誕生、即ち自覺と云

ふ経験を有するか否かといふことである。この問題に就いては既に多くの學説があるが、其の一つは生物學、心理學、社會學等から出る學説、今一つは形而上學、宗教、歴史學等から出る學説である。

第一は、婦人には斯くの如き自覺はないといふ説、即ち獨立したる信仰は有しないといふ考へである。婦人の信仰、婦人の人格は男子に依つて出来るもので、畢竟婦人は男子に附屬したるもの、男子より出で、男子に歸するものである、故に婦人は自覺することは出来ぬといふのである。この説の人々はまた曰く、形而上學の説には人格は *morad* である。この原字は男性的のもので、婦人は其所から分れ出たものであるから、婦人には獨立したる人格はない。故に婦人には、愛とか價值とか、徹底とか、精神生活とか云ふごとき心理状態はないといふ。又男は、完全に發達せんとする又永遠に生きんとする徹底的意志がある。けれども婦人には斯ういふものはない。婦人は最高の價值とか、或は絶對の理想とか完全の自由とか、さういふ事に行かうとする向上心がない。婦人は絶對に男子に服従し、全く男子の附屬物として没我するもので、男子の爲に生存するものである。この状態は即ち男の實在から出て、又其れに歸するものであるから、婦人としての永久の獨立の價值、永久の生命はな

いものである。故に婦人は宗教的生活の出来ぬものであるといふ説である。

第二の説はこれと正反對で、男は女から出たもので遂に女に歸するといふ説である。今はこの説は立たないやうになつたが、昔は生物學からも動物學からも立論せられたものである。慈悲とか、平和とかいふことは女から出たもので、男は良心なきものとせられてある。それで、西洋でも道德の頹廢しやうとした時、夫れを維持したものは婦人である、といふ説も立てらるゝのである。

第三は男女兩本位説である。これは、生物學、社會學からも立論せらるゝのであつて、男と女とは兩方とも獨立した價値のあるもので、社會は男と女とに依りて組織せられ、實在は男子と女子とあるといふ説である。

この説は最も確實なるものと思ふが、此の兩本位説を十分深く論ずるには先づ monad 説に就いて研究する必要があると思ふ。

モナツド説

ライブニツツは、宇宙の本體は monad であると云つて居る。抑も、モナツドとは如何なるものであるか、それを一言を

以て言ひ表したいと思ふが、未だこれに適當なる言葉がないから、暫く原語の儘を用ひてその意味の説明をしたいと思ふ。

日本の三種の神器の一つにも鏡がある。鏡は昔から大切なものと認められてあるのみならず神道に於ては之を以て御神體とする場合が多い。モナツドは即ちこの宇宙の姿を映す鏡のやうなものである。先づ第一にこのモナツドは只一様式を繰返すものではない。又各單子が互に模寫的に出來て居るものではない。無限に無數に異つて居る。只一つ獨特なる通有性はモナツドには他を拒絶する除外的性質と、他を包容する性質とを同時に兼ね備へて居る。それでライブニツツは『其の窓からは如何なるものと云へども入ることなく、又如何なるものも出ることが出來ぬ。造るものもなく又滅ぼすものもなく、神と共に出來、神と共に存するものである』

と云つて居る。我々人間もこのモナツドである。さうして我々人間は萬有の現象を知覺といふ窓を通してわがモナツドの鏡に映すことが出来る。或は又現象を起す處の實體即ち神の姿を映し表すことも出来るのである。故にモナツドは實體を映すとも云はれるし、又入れるとも云はれ、又實體の中に入るとも云はれる。つまり相互に感應交換するものである。ライブニツツはこの性をさして先天的調和性といつて居る。この説は人格

の調和融合性といふことに就いての有力なる新しい考である。

人格の融合

畏くも、嘗て昭憲皇太后の宮の御歌にも

白妙の衣の塵は拂へどもうきは心のくもりなりけり
と御詠じ遊ばされた如く、又クリスト教の訓へにも、心の清きものは幸なり、神を見る事を得べければなり。とある様に、心の鏡の清きものにはものゝ實體が映るのである。吾々の心には通有性と個性といふものがあつて其の兩方面がよく調和しないと鏡が曇るやうなものである。自分の心の鏡に神の實體を映すことが出来なくなる。即ち人間の發展が出来なくなるのである。そこで、神のすがたを映すといふことは自分と他人と調和一致するといふことになる。

ライブニッツ又曰く『神は至高至善完全無缺のモナツドであつて、總てのものゝ土臺であり條理である。さうして總てのものに發射して居る光は神であり、又總てのものゝ美は神である。故に神は總ての宇宙の調和である』と、神は總ての象を備ふるモナツドを有して居る完全無缺なる人格であるといつても宜しい。そこで他の總てのモナツドは皆其處迄達し行かうとして居るけれども、それは又無限の階段である。併し無限の階段

ではあるが、其れは程度の差であつて、種類の差ではない。人間にも同じ神靈が宿つて居るのである。總ての靈はモナツドから出来て居る。云ひ換ふればモナツドは萬有の靈である。世界の本體である。人格の土臺であるのである。

斯くの如くにして段々と調べて行くと、人間に男、女或は主、僕の差別を立つることは間違ひである。近頃進歩したる生物學や心理學、形而上學等から云つても、女子もモナツドであり人格である。其の故に人格の徹底といふことも出来る。又人格の自由と云ふ事を知ることが出来る。言葉を換へて云へば女子も自主のものであり、其の意志も選擇も自由でなければならぬものである。

日本に於ける女子の地位

そこで再び女子の宗教的生活に就いて云はねばならぬ。自己に徹底する生活、自覺といふ階段に入る事が出来るかどうか。即ち他より論ずるのではなく、女子自身にその人格の尊嚴とその價値を認むることが出来るかどうか、それが第一の問題である。それを信ずることが出来なければ女子の人格が出来たと云はれない。日本では、その人格を一樣に認めなかつた。これを一樣に考へる様になつたのは僅にこの四五十年來のことであ

る。従つて人格の尊重などといふことを女子に適用すれば我が儘を教へるやうなものであると思ふ人さへ今もあるのであるが、これは謬見である。我が儘をするといふことは人格を損ふことである。眞に人格を養ふものは、人格を破らるゝ事に對しては之に抵抗し眞の自我を維持する處の意志が發達して居ねばならぬ筈である。即ち自重である。自分を尊重する意味である。我が日本に於ても婦人がこの階段に進まねばならぬ。又進み得ることを信じなければならぬ。

宗教生活の第二階段

さて、それならば宗教生活の第二階段には女子も進み得るか否かといふ事を申して見たい。即ち女子も其の自我を社會的に擴大した生活を爲し得るかどうかといふ問題である。宗教生活の第二階段といふは、私はこれを神祕的社會生活というて居る。即ち物質的形骸生活の外に、人間の五官に依つて知る事以外の靈性の生活である。この信仰は即ち、總ての人格は悉く靈性を有し、自他を超越して團體的人格を作ることが出来るといふのである。最高の自我を社會的大我の中に認め、總ての人を愛し、總ての團體を愛し、總ての關係的生活に生きて其の調和的生活を營むことである。これを心理的に云へば集結的價值と

もいふのである。人々の人格生命が互に相感應し相接觸し融和協同する事によつて、互に生育發展擴充せらるゝものである。故にこの生活は一切の外形的藩籬を撤去して人格と人格と深く相信任し、深く愛護し、扶助するのである。斯くの如くにして渾一融合したる人格は漸次擴大して、家庭、國家、社會等一切の人類團體を發展せしめて完全なる人格の團體たらしむる生活を營むのである。要するに、生命に自由にして偉大なる發展、擴充、充實に精進する主旨に於て、個人は團體に於て無私の犠牲となり、團體は個人に對して無限の仁愛を布き、靈性至善の實現すべき信仰を以て奮闘する生活である。この生活は一方に於ては自己の人格の創始であつて、他方には國家社會の靈格を建設するのである。

宗教の第三階段

従來の宗教ではキリスト教には天國といふものがあり、同じ意味で佛教には極樂といふものがあり、神道には高天ヶ原といふものがある。斯ういふものは皆神祕的世界で、神祕的人格の團體である。又宗教的團體で、フリーメイソンといふものがあるが、このフリーメイソンは何に依つてするかといふと、其のメーソンの各人格を以て理想の宮殿を造るといふのである。故に

其の表象として其れに入會の初めに於て鑿と槌とを與へらるゝのである。つまり各自の意志を切磋琢磨して銘々の人格を作り、其の人格と人格とが相融合した處の大人格を作らうとするのである。此の意味に依つてプラトニーは次ぎの様に云つて居る。『國家は人間の如く精神的作用を爲し、各部分を有する統一體となつて居る大人格である』又アリストートルは『國家は有機體である、故に自己により自己の目的を達する精神の主體たらざるべからず』

と云つて居る。故に今日の人格修養の目的は夫等の意味と餘程一致するやうになつて來て居るのである。即ち我々は何人も一つの天才である。是等の天才は何れも何かのフリーメーションである。即ち各個人の目的は各自の大精神を發揮して其れを大美術に表現するのである。政治家も、教育家も、宗教家も、美術家も、音楽家も、詩人も、此の大理想を實現する處の美術家である。即ち政治家は直接國家の建設者であり、詩人は國民の理想を描き出す技術家であり、音楽家は其の間の調和を計る處の技術家でなくてはならぬ。そこで吾々が眞の人格を發揮し眞の教育を受けて大人格になるといふ事は、つまり各自の天職を見出して大理想を發現し其の任務を盡す事が即ち人生の目的、人間の天職である。故に我々は修養の第一階段に先づ自分の意志

を切磋琢磨して自分の人格を立派に彫刻する處の技術家とならねばならぬ。さうして他人の人格と相融合して其所に美しき神の國を建設するのである。第二階段は社會的神祕的人格を實現し其の大理想大精神を顯す事に渾身働き得るといふ事に進み得ることが第二階段の神祕的社會的生活である。この階段に入らばどういふ修養を積まねばならぬかといふと、これは言葉では十分に云ひ表すことが出來ぬ。たゞ暗示に依つて相感得するものである。時と處に於て起る自分が關係する所から始めねばならぬ。他人に同情し親切にすると云ふ事も其の一つである。故に此の意味によると吾人は絶対に他人の爲にするといふ事はない。即ち他人に對して思うた事、行つた事は其の大部分自分に歸つて來るのである。委しく云へば其の同情、親切といふことは即ちそれが自分の人格の經驗となるのである。故に社會的關係、神祕的生活も先づ自分に最も近い關係の處から自ら工夫し、自分で見出し、自分で經驗するより外はない。經驗そのものが生活の價値を増すのである。

天上生活

斯くて宗教の第三階段に入るのである。宗教の第三階段とは自我を宇內的に向上し、歴史的に發展する事即ち人生の天上生

活又は神祕的歴史的生活である。天上生活とは限りなく發展し進歩する所の生活で、肉眼を以て見る事の出來ぬものである。けれども靈感を以て直感し得るものである。故にその靈界と我が人格との關係は如何なるものであるか、如何にその兩者が交通し得るものであるかと云ふ事を先づ了解する事が必要である。The aspiration of man is inspiration of God で人間の向上心と神の天啓とは同一物である。故に活動の方から云へば、神が我が内に來り我は神の懷裡に入る、と云つてもよい。これを神祕的亢奮或は神祕的引力ともいふ。その間に働き合ふ力を感應或は交感ともいふのである。尙これを今少し物質的の表象を以て譬へを引いて先づ地球に就いて云へば地球には南北兩極があるが其の力の一つである。この南北兩極の力の一つになつて居るのが磁石である。磁石はどんな小さい針でも又何處に在つても必ず南北兩極を指す、さうして世界中の磁石は皆その力を感じるのである。其れは世界の最も大きな磁石の力を受けて居るからである。磁石に軟鐵を持つて行けば必ず其處に感應が移るのみでなく、その力は殖えこそすれ減る事はないのである。

夫れと同じく宇宙には一つの意志がある。さうして吾々個人にも各々一つの意志がある。善を慕ひ惡を改めるといふ意志

は、宇宙の意志に一致を求めるからである。或は又我々が眞善美を慕ふは、宇宙が眞善美であるから夫れに感應するからである。

屢々云ふ如く、今日の宇宙觀は宇宙の意識的なもの、或は精神的なものであるといふことである。つまり宇宙にはチャントした目的があつて、其の目的を實現しようとして居る、之が宇宙の進化である。宇宙は常に創造されつゝある。夫れは各個人の目的と宇宙の目的とが相一致しようとする。恰も宇宙は一つのコスモス (cosmos) で無數の細胞を以て出來て居る。さうして無數の小さい細胞は此のコスモスの働きに一致しようとして居る如く、宇宙全體の目的は各個人のモナツドの目的にかなふやうに出來て居る。今日の神祕的運動即ち現世界の裡に働いて居る處の活動を察知して、それを自分の内にも體現しようとする所から非常なる熱心が燃えて來る。これ即ち互に相一致しようとして居るのである。こゝが即ちインスピレーションを受けるので、夫れに依つて我々は益々向上心が燃えて來る。それと同時に宇宙の活動が益々我々に感じて來るのである。斯くの如くにして感應せらるゝ天啓といふものは絶えず起つて居る。又人間が夫れを感受するといふことも常住に起る處の事實である。故にこの天啓といふことをただ客觀的にばかり見よう

としては人の力は益々放散してその目的を達することが出来ない。外界の現象に注意を向けると同時に、深く内に覺醒して、現實に於て心の靈眼を開いて天啓を感得目撃せねばならぬ。即ち眼前に起伏する世相の下に、深く流るゝ時代精神の中には

屢々天啓的暗示があつて、吾人の根本要求たる向上心に觸撃し、一道の閃きとなりて覺えず覺醒奮起せしむるものがある。その時の休徴に我々は深く耳を傾けねばならぬ。さうして其の眞意を覺らねばならぬ。而して之に對する反應震動を怠つてはならぬ。之即ち天來の新機會である。インスピレーション或は天籟の聲と云ふのである。かの佛國の大革命は、ルツソーの頭に閃いた一種の天啓が導火線となつて彼の奴隸解放、民權自由といふやうな事が實現せられたのである。客觀の立場に在るものをして云はしむれば夢の如く感ずる事が、一度天啓を受けて覺醒したるものには即ち眼前の事實であつて、如何なる困難があつても、その目的の爲に突進する勇氣を持つのである。

人々は各自その靈眼を開いて眼前に起伏する天啓的暗示を感得せねばならぬ。又頭上に響く天籟の聲に耳を傾けて我に與へられたる使命を覺らねばならぬ。今我が國家は非常なる一大危機に遭遇して居る。即ち萬民の頭上には天籟の聲が響き渡つて居るのである。それを感得し、それに眼醒め得ぬものは、如上

の宗教の第三階段に進み得たるものとは云ひ得ぬのである。教育も宗教もこの階段迄進まねば生命のないものと云はねばならぬのである。

故ゼームス博士は嘗て、宗教的經驗に就いて次ぎのやうに云つて居る。『宗教の經驗は、敘情的魔力か或は熱誠豪邁の心情に訴へると云ふが如き形に依つて顯れるのである。故に何か非常に満足し、その間に愉快を感じ、力にも愛にも満ち／＼て非常に感奮し、非常な犠牲の念が起るのである。かういふ事は即ち人間本來の至誠心の發現であつて、人間が天の使命を受けたる時は、火の中の水の中をも恐るゝに足らぬといふ熱誠豪邁なる心の態度が顯るゝのである。故に他人に對しては眞に厚意を以てして所謂仁者に敵なしといふ状態になるのである。さすれば自分自身は勿論平和安全となり、他人に對しては非常なる愛惠となるといふやうな態度が出来て來るのである』

ゼームス博士は凡ての人々の實經驗を擧げて斯くの如く結論を立てたのである。人間がこの經驗を積み、即ちこの宗教の第三階段に進む迄には、前にも屢々述べて置いたやうに、第一第二の階段を経験して來なければならぬ。併しこの凡ての階段に於て始終離れてはならぬ事は人間衷心の祈りである。祈りは宗教の最初の經驗で、又最後の神と我との交通である。故にゼー

ムス博士もこの祈りといふことに於て『祈りは人格と人格、神と我との交通である』と云つて居る。人格と人格の交通に於て非常なる感激をするといふことは凡て人間の衷心の祈りである。祈りはたゞアーメンといひ、南無阿彌陀佛といふ題目其の言葉ではない。ライフである。生命から出た靈の聲である。我々の日常の修養といふことも、この生命に觸れた誠の聲、誠の行爲でなければならぬのである。今日、思想界の魁として居るベルグソンは今日の女子の教育には非常に同情を持つて居る人であるが、昨年余がバリに於て氏に面會せる折話された言に『今後の文明は女子の働きに俟つことが多い。それは、女子は最も直覺力に富んで居る、さうして宗教的生活に最も必要なる要素が女子に最もよく發達して居る』と云はれた。一方には女子には自覺する事すら出来ないといふ批難する人もあるが、併し今日の女子教育の經驗上から事實に於て確に女子も自ら醒め、自ら使命に奮進し得るといふ事は有力なる經驗の結果の示す處である。

故に屢々繰返す如く、我々は先づ第一に自己に徹底したる生活をなさねばならぬ。即ち人格を尊敬し、苟も我が人格を傷つける様な行爲はしないと云ふこと、又は何か人に頼らうとする事、憊悴を頼むこと、等は先づ第一に反省し改めなければならぬ

ぬことである。さうして靜かに祈つて我が耳許に響く天籟の聲を聞くのである。云ひ換ふれば國家の使命として我が感じなければならぬ天の聲に従順に従はねばならぬのである。

今我等の眼前に展開して居る天啓は何であるか。即ちこの時代の休徵は何であるかといふと、今、我が國は一大危機に遭遇して居るといふ暗示に氣附かぬものはないであらう。日本は今、過去四十年來の教育、宗教、文化をして徒勞に歸せしむるか、將た一大飛躍をなすか、國民の生命の發現如何に依つてこの兩途の何れかに分るゝ危機に逼つて居るのである。男女、老幼の區別などはない。何れも各自に其の使命を見出して各自の使命の場所にその責任を盡さねばならぬ。我等の頭上には常に自分の使命を指示して、頻りに呼び醒まして居る天籟の聲が響いて居るのである。その使命に従つて猛進せねばならぬ。如上の宗教的生活又は修養法に就いて數萬言を用ふるとも、要はたゞこの意味の徹底したる實行に外ならぬのである。そこで私は左に、如上の考を恰もよく云ひ表して居る處の詩人の詞を意譯してこの章の終りに置いて諸子の参考に供するのである。

一、爾の靈に宿れる奇しき力を信ぜよ、爾の靈は爾の信ぜる神の力の顯現なり。

二、爾の靈の力は渺茫たる海洋のごと廣大無邊にして測り難

し。今し爾はダイヤモンドの岩窟の上を彷徨せるを知らざるか、靈の眼を開き、往きてその寶を求めよ。心を明らかにして迷ふことなく、幸ある爾の前途を誤るなかれ。

三、爾一たび神を信じまた爾自らを信じて猛進勇往せば爾の力は何物かよく之を妨げん。歩一步遂に先人の未だ踏まざる高嶺の頂きに攀ち登るべし。猛進せよ、向上せよ。

諸子の中には未だ試みない所の才能がある。而して其の潜伏力はあなたの向上心と、天啓より受くる刺激に依つて發揮するのである。今や天籟の聲は實に諸子の内に響いて居る。

女流の宗教家

宗教的生活が三つの階段に分れて居るといふことに就いては、既に其の概略を説いたのであるが、さてその第三階段の宗教的生活が女性の間には如何に實現されて居るかといふ問題に就いて考へねばならぬと思ふのである。

ブラヴァツキー夫人

近く十九世紀以後に於ける女性宗教家の代表としては露西亞のブラヴァツキー (Blavatsky) 夫人を挙げねばならぬ。夫人は露西亞の皇族に生れて、一地方官——日本で云へば知事位の位置の人に嫁して、その家政を執つた人である。後西藏に入つて

秘密教の行者について七年間の苦行を積んだ人である。以後靈智學といふものが宗教として勢力を占むるやうになつたのは全くこの夫人の働きである。夫人はその信仰を主として歐米に傳道したのであるが、其の方法は常に求むるものに與ふといふので、敢へて自分の信仰を他に強ふるのではなかつた。併し、昔から一宗の宗祖といはるゝ程の人は多く世間からの迫害を被るもので、ブラヴァツキー夫人も遂に殺害を免れることが出来なかつた。その著書 *Isis Unveiled* は夫人が最後の時『これは自分の死後廿年後に世に公にしてくれよ』と云つたのであるが、十年後には既に世に公にせらるゝに至つた。夫人は天啓的暗示を受けて斯くの如く宗教的生活をした人であるが、又非常なる精力家で非常な集注の出来る人であつた。且語學に精通して居つたから博學博識であると共に、その哲學的頭腦を以て複雑なる思想をも組立て得る能力を持つた。その著書も澤山あつたが、中にも前の *Isis Unveiled* は著大なるものである。

ブラヴァツキー夫人がその著に *Isis* と命名したのは同じ名の女神の名を以てしたので、即ち廿世紀の文明の序幕は女性の手に成るといふ事を意味したものである。

『人間の男性とか女性とかいふものはもと凡て神から生れたもので、其の神は埃及でも日本でも女性であるといふ考になつ

て居る。さうして神は平和を好み、慈母の如き情を以て人を愛し、美の化身であり、同情の權化である。この平和、愛、美、同情、産む、といふことを女性的と見ると今日の神の御姿は即ち女性を以て代表せられて居るといふことが出来る。

クリスト教の三位一體といふことは、神は Fatherhood (天父) で男性的であり、聖靈は Motherhood (女性にして天母) であつて、其の間にクリスト即ち Sonhood (神の子) といふものがある、これは神格の三方面となつて居るのである。又智の方面から云ふと、女性は直感性に富んで居るから解剖するより寧ろ其の真相を直感することが其の特長である。斯ういふ方面から婦人は神の最も深い暗示を受け、又時代の休徴を直感し得る能力があると云ひ得るのである』

ブラヴァツキー夫人は西藏に入つて七年間の苦行をした。この修行を Yoga といふのであるが其れは即ち徹底眞我といふ意味である。夫人は女性の身で殊に外國人といふ僻見を持たれながら彼の危険なる所として目されて居る西藏に入つて難行を遂げたといふこと、それ既に奇蹟の如き感を持たしめるのである。

夫人はこの七年間の修行を積んで非常なる精神力を發揮し、さうして遂に靈智學を創始したのであるが、これは東西思潮の

あらゆる方面からの研究を網羅しそれを歸一したものである。今日云ふ所の内在的神といふことなどもこの夫人の創見に負ふ所が多いのである。併し夫人は當時の社會から迫害を受けた程の人であるから、其の著書も公に讀む人は少數であつた。けれども今日尙其の思想の花が漸次に咲き出るといふことは何よりも、その著書が暗に多くの人心に讀まれ理解せられて居る證據である。夫人の後をついだのは男子ではジャツジ氏、婦人ではミセス チングリー等で其の信徒はもはや十數萬に達して居る。

ミセス エディーと中山みき子

次に婦人の宗教家としてクリスタヤンサイエンスのミセス エディーを擧げる。ミセス エディーが自分の向上心に或暗示を興へられて多くの病人を癒し、又人々の煩悶を救うて兎も角も何百萬人といふ人に安心を興へたといふことは、一種の信仰でなくては動かぬことである。

第三には日本の天理教祖中山みき子といふ婦人である。此の人も一つの信仰を以て自らの生命財産を抛つて世を救はんとしたのであるが、今日は三百萬以上の信者を有して居る。みき子はその夫にも親類にも非常な反對を受けながら家藏を賣り拂うて凡てを宗教の爲に捧げたのである。のみならず始めは大いに

迫害を受けながら屢々牢獄に繋がれたのであるが、遂にその信仰を枉げなかつた。如上の女性宗教家を以て直ちに完全無缺といふことは出来ない。けれども兎も角も天の聲を聞き、自分の

使命を感じ、死を決して世と闘うて宗教の爲に一身を捧げ得たる事は女性の宗教的生活の實現を意味して居るものである。

この外にも尙十九世紀に於ける女性の自覺ある精神生活をなし、世の救済に盡した人は今茲に枚擧するに遑もない程である。中にもクリミア戦争に於けるナイチンゲールや、船員の母と云はれた英のアグネス・ウエストン、救世軍のブース大將夫人、監獄改良をしたエリザベス・フライ及び彼の亞米利加の南北戦争の導火線となつて、人身賣買を禁止せしめた小説アンクル・トムスキヤピンの著者ビーチャー・ストウの筆の力は即ちその人格の反映である。昨年九十歳の高齡を以てこの世を去つた國境人種を超越したる人道家ミス クララ・バルトンの如き人もある。

斯くの如く、婦人の至誠、至愛、至美、感化、同情の力を以て人間の生活が正しきに改められて行くことと云ふこと、他にこれ程強い力はないのである。この意味を以て婦人はより宗教的であり神の如きものであるといふ事が云はるゝと思ふ。

現代の新宗教

さて現代の要求は何であるかといふに、人間をして各々自分の價値を覺らしめるといふことである。即ち自らを見出し、自ら自分の特色を發揮して一つの光彩を開展しようといふのである。この要求にそふには先づ神と人との間に自分といふものを見出して自我の徹底を遂げなければならぬ。これを第一階段として、第二階段は之を社會的に擴充し、第三階段は之を無限に生命あらしめようといふのである。即ち婦人が天籟の聲に眼醒め、呼び起されて、其の個人として又團體としての使命を認め、生涯を其の目的に捧ぐる迄の一大覺悟を要求して居るのである。

實に婦人の覺醒はやがて今世紀文明の幕開きである。

〔「家庭週報」第二百八十一號—二百八十六號・實踐倫理講話〕

ジヤドソン博士紹介の辭

シカゴ大學は二十五年前の創立で、最初の總長ハーバー氏の後を繼承けて以來多年盡瘁せられて居るのは實に此のジヤドソン總長である、博士の高尙なる人格が同大學の内外に重きをな

すと共に、同大學は物質的文明の勢力旺盛を極むるシカゴ市に於ける精神的感化の中樞として、有名なるミスアダムスの創立したハル、ルウスの如き有名な社會事業と相俟つて、着々良好なる影響を及ぼして居ることは著しい事實である。余も漫遊の當時同市の眩惑的な物質的勢力の裡に一方精神的勢力の重鎮たる同大學を觀、且其中心たる總長の君子的人格に接して眞にオアシスの感を有したのである。

シカゴ大學は總數七千名の學生を有して居るが其中二千名は女學生である。

本校教授渡瀬博士は嘗て同校に學ばれたのである。又本日此處に列席の櫻楓會員山内八重子氏の良人山内博士も亦同大學に學ばれ今猶其教授に助力して居られる。

此等の事實はジャドソン博士が日本に對して如何に大なる同情と寛厚の態度とを有せらるゝかを證して餘りあるのである。

〔家庭週報〕第二百八十六號 大正三年九月

戰の動機

眞正の平和を祈れ

今日の歐洲の戰爭は如何に大なる悲劇を演じて居るであらうか。其の影響は東洋にも及んで、世界すべての國は悉く大なる迷惑を蒙つて居る。實に歴史あつて以来今日の如き有様は無いと云つてもよいのである。過日來新聞の報ずる處によると、亞米利加大統領ウエルソンは命令を下し此の十月一日を期して世界の平和のために全國舉つて祈禱會をなすと云ふ事である。無論眞正の意味に於て世界の回復を望まぬものはない。速に戦局がついて商工業其の他すべて人間自然の狀態に立ちかへる事は誰も願ふ所であるが、併し斯かる大騒動を起して只何等の目的も達せず、又其の良心の覺醒も來らぬ前に平和が回復する事は決して願ふ所ではない。又決して眞正の平和にかへらうとも思はれない。眞に世界人類のために貢獻するところあらんことを期するものは心密にかゝる騒動を憂へるが、又一方には此の戰に於て人類の目的を遂げ、眞の勝利を博せねばならぬと思つて居るのである。故に皆此の戰爭から出来るだけ好い結果を得た

い、戦争の目的を貫徹したいと思つて居るのである。獨逸皇帝と雖も矢張り獨逸のために天帝に對して勝利を祈るのであらう。露西亞は東京に於てすら祈禱會を開いて居る。連合軍は連合軍の勝利を祈り、英國、佛國亦皆其の戰勝を祈つて居る。日本帝國も亦然りである。然れども此の祈に耳を傾ける上天——人類の活動を支配する宇宙の靈——絶對者といふものは果して其の祈を悉く受け入るゝであらうか、動機の誤れる祈にも耳を傾けるであらうか、是は今日の大問題である。不正なりと雖も訴ふる所のものすべての祈を聞くならば、そは不正の神である。かかる神のもとに正しき人道の成立するものではない。

内外の苦戰

實に今度は千載の一遇である。天來の機會である。此の時に人類が大發展するのである。只物質的戰爭でなくして此の内に非常な根本義がある。先づ吾々は大局に目をつけて、今後世界は如何に發展するか、如何なる運命を遂げようとして働いて居るか、即ち其の傾向を感知せねばならぬ。近くは我が國が此の騒動に對して選擇した態度は如何、又其の後の行動は如何と云ふ事を考へねばならぬ。古來日本は東洋の一孤島である。白人ならぬ人種の一部である。而して世界ありて以來世界を統一支

配するものは悉く白人種に限られて、其の他のものは奴隸野蠻人と云ふ偏見を以て支配されて來た。處が日清、日露の戰勝の結果我が國は終に世界の仲間人をする様になつたのである。然るに近來又日本人排斥の聲が起つて、日本人は世界の運命を破壊するものである、喧嘩好きの國民である、と稱へ出したのが獨逸人で、種々の方面に於て日本をして世界に威信を失する暗示を與へて居る。米國の一部に於て日本を排斥するやうになつたのも一は獨逸の勢力を以てしたのである。斯かる外敵を持つた我が日本は今日果して如何なる内情にあるかと云ふと、其の力に於ては諸外國に比し誠に微々たるものである。茲二十年來の諸外國の發展は實に驚くべきもので、商工業は勿論陸、海軍に多額の費用を拂つて軍備擴張に力を注いで居る事は非常なものである。然るに新興國の我が國では經濟の困難からして充分に軍備を擴張する事が出来ない。一の大砲を備ふるにしても今日は一回の試験に要する費用が六十萬圓といふ事であるから、之等から推して考へても、戰爭には非常に金が要るのである。膠州灣に要する費用が僅三ヶ月で五千何百萬圓を使はねばならぬといふ事である。國家の威信を保たんとすれば金も使はねばならぬ。之は免るゝ事の出來ぬ事で、之を免るゝならば自滅するか奴隸になるかせねばならぬ。其の他文明を進めるには教育

が必要であるが、日本の教育は完備の域に達するにはまだ中々困難である。之等を考へると我が國民は内外に苦戦すべき時にあるのである。

動機の誤れる威信は遂に墜つ

威信といふ中には各國の信用即ち、斯の國は文明國である、眞に世界を進め導き得る國であると云ふ信任がなくてはならぬ。獨逸は科學、哲學、文學すべての研究に於て遙に世界の大學を凌いで居る。商、工業に於ても、軍事に於ても、非常に驚くべき威信を高めて居る。併し今日の獨逸皇帝は只物質的動物的になつて國際を重んじない。ベルギーの如き小國も奮起して來た。畢竟獨逸の威信はその誤れる動機によつて將さに地に落ちんとして來たのである。世界の信用を失ひ威信を失へば、國家は榮ゆる事は出來ない。吾々の國家も世界の威信を持たねば世界を支配する事は出來ない。日本は實際に於て獨逸が批評する如き、或は亞米利加の或一部の人が云ふ如き、人道にはづれたる事をなしつつあるであらうか。斯かる事を主として居るか否かは、今回の如き機會に於て表れるのである。幸にして我が天皇陛下の宣戰詔勅——内閣の最後通牒は我が國の威信を高めるに一致する態度をとり、其の後とても着々實行して居るの

である。我が國は此の最後の通牒を發するまでに、獨逸に向つて一週間の餘裕を與へ其の反省を促したに關らず、獨逸皇帝はこれに對して適當な回答を以てせず、飽くまで戦はんとして只空しく七千の兵士を鑿にしてしまふのである。又其の本國に於ては日本の學生を抑留した、蠻行をしたと云ふ事である。然れども我が國に於ては公使が獨逸に歸る時には首相自ら丁寧に之を見送り、國民亦少しも侮辱を與へなかつた。之等は非常に人道に適つた仕方である。

吾々には無論最後の決心——己むを得ぬ場合には斃れて後止むの覺悟を持つて居るが、併し飽くまで進取的態度をとらねばならぬ。人道主義に背かない即ち世界の平和を來すために戦ふ戰でなくてはならぬ。之はひとり外交軍事の上のみならず、國民一致殊に婦人の間に我が威信を高める行が起つて來ねばならぬ。軍國の女子として我が國の婦人として如何なる態度をとるべきか、如何なる任務を盡くすべきかを考へて其の大方針に叶ふ計畫を立てねばならぬ。勿論綳帶を巻き慰問袋を送る事も大切であるが、猶それ以上にこの時機に於て成さねばならぬ任務のある事を婦人各自の胸に深く感銘せねばならぬのである。

〔「家庭週報」第二百八十七號〕大正三月十月

難澁なる國語の救濟

ローマ字採用のこと

歐米の學生と日本の學生との腦力を比較して見ると、如何に國語の難澁がその腦力に影響して居るかを屢々實驗するのである。彼は其の言葉の儘を文章の上に表し、又文章を直ちに理解して其の真相を攫み得るに反し、わが國語は所謂文章と相距ることが甚しい。文章は文章として學び言葉は直ちに文章に書き表すことが出来ぬ。其の間に文章とする技巧を要し、又文章を理解し得る努力を持たねばならぬ。それ故一つの事實を發表せんとし又は構成せんとする時には必ず文章を書くこと、文章を解することの迂回した時と力を費すのである。この習慣に養はれた腦力は何事に對してもその活きの遲鈍であることを免れない。これは教育界に於ける重大なる根本問題の一つである。

學制改革の完全なる解決を得んとすれば、單に學制の形式上の攻究だけではだめである。必ずや同時にこの教育界に存する根本問題に就いて攻究する所がなければならぬ。即ち國語問題、外國語問題、學風問題の諸根本問題の中にも難關の難關は如上の國語問題である。この問題の提出は從來も屢々せられた

のであるが、未だ十分なる解決が出来ぬのを見てもその難關である事を想像するに難くない。この困難を救ふには先づ左の二つの問題の解決をつけねばならぬ。即ち

一、在來の文字に就き之が簡便なる取扱ひ方を工夫する事

二、簡便なる文字を採用する事である。現在使用しつゝある漢字は盡に學習、記憶に困難な計りでなく、記録、印刷等にも不便である。殊に印刷に於ては、ローマ字に比して六倍の勞力を要するといふ。タイプライターの使用もまた甚だ不便である。斯様な各方面の不便を除去して、繁劇な文明的事務用、及び幼童の學習に適せしめんがためには、字體に關する原則や、其の取扱ひ方から研究して、以て學習、記憶、印刷にも容易なる方法を發見せねばならぬ。併し一考しただけでも斯くの如き複雑な在來の文字に對し、單にその取扱ひ方の改良のみに依つて根本的に其の困難を除去することは出来ぬ。爲し得てもそれは非常に迂な道である。故に在來の文字を存し、其の取扱ひ方のみを改良して以て其の困難を除くことは當面實際の解決法とすることは出来ぬ。寧ろ文字其のものを改むるに若かずといふ結論に到達するのである。さて、文字改良に就いて目下假名説とローマ字説との二説あるのであるが、ローマ字は最も簡易なることゝ、世界的なることに於て假名に優り、假名は綴語字數の少

きこと、及び古來の慣熟文字たることに於てローマ字に優つてゐる。けれども、假名は其の字形上及び習慣上、漢字と分離して單獨に使用することは實驗上如何にも困難な事であるばかりでなく、文字上、歐米に對しては勿論、東洋に於ても全然孤立の地位に立ち、文明の趨勢と逆行するに至る不便がある。故に予は日用文字としてはローマ字を採用し、假名及び漢字は、歴史的特殊用字として保存するの説が最も當を得たものと思ふのである。

『ローマ字を採用するのは、國粹保存の趣意に反し、國民の美性を傷くる恐れがある』といふ非難があるやうであるが、我が文明の由來及び其の發達の跡を検し來れば、此は全く杞憂に過ぎぬと思ふのである。又『ローマ字を採用するは可なるも、漢字の表現に適するやうに發達し來つた從來の語辭を其のまゝ、ローマ字を以て表現することは困難である。而も此の語辭を改造することは、非常なる難事であつて、到底短日月の間に能くし得ることではない。此の問題にして解決せられざる間は、ローマ字を採用しても、其の効果を發揮せしめることは出來ぬ。寧ろ假名を専用して、其の價値を増大する工夫を凝らした方が捷徑である』といふ説もあるやうである。此の説は實にローマ字採用に對する最も重大なる難點を指摘したものであつて、之が

解決の實に容易ならざるものがあることは吾人も亦之を認めるのである。けれども其の漢字の排斥せざるべからざること、ローマ字の最も優秀なることを認めた以上は、一時的の困難を恐れて改善に躊躇すべきでない。何事も雖も改新には必ず困難を伴ふのである。故に若し困難を恐れて躊躇して居ては、如何なる改新も行ひ得ない。吾人は文字の如き、日常生活と離るべからざる絶大の武器の改善に際し、一時の困難の爲に之を中止することなく、先づ採用の方針を決し、然る後其の困難を緩和する方策を求めぬのが至當と思ふのである。且語辭の改善を経なければ、ローマ字は全然無用といふわけではない。又語辭改造の必要は、假名専用とするも亦同様に存するのであるから、之が爲に讓歩して假名を採用すべしといふ議論は成り立たないのである。最後の非難は『若しローマ字を日用文字として採用する以上は、必ず先づ小學校に於て之を學ばせることゝなるのであらうが、小學校の兒童に對し、現在國語の困難ある上に、更に未だ社會に實用せざるローマ字を課するには、幾十年の間、兒童をして無用に過重負擔の爲に苦しむるものである』といふことであるが、之も亦縱令過重負擔とするも唯一時のことであるのみならず、ローマ字の讀力、綴方、書方の一般を教へるのは極めて少時間で足りる。又漢字などよりも兒童の好奇

心に投ずるので、左程兒童を苦しませることはないのである。一旦ローマ字を採用すべしと決した以上は、さのみ顧みるを要せざる些事であると思ふ。

以上の所見に依つて吾人は國語問題解決の根本はローマ字採用に在り、ローマ字採用は尙に教育上の浪費を救ひ、其の効果を増大するに有効なるのみならず、知識、學問の普及上、社會に實用上、國際關係上、之を總括して、國家の發展及び文明の促進上必要なりとするものである。

そこで、此のローマ字採用の準備としても、亦ローマ字採用と否とに關せず直ちに必要なことは、使用漢字數をなるべく減少し、殊に難澁異例の文字を用ひず、慣熟した平易なもののみを用ひることにする注意が肝要である。専門學術用語も成るべく新熟語を造らず、原語のまま、假名書きにするが便利である。此のやうな語辭はたとへ翻譯しても之を一般民衆に理解させるには説明を要するのであるが、又少し用ひ慣れると、例へば彼のランプ、シヤツ、シヤボン、レール等の言葉を普通語として用ひて居るのでも分ることである。

次に國語整理上早速必要なことは、必要止むを得ざる場合の外は一般に口語文體を採用することである。現在に於ては種々の文體があるばかりでなく、殊に國民須知の官公文書など

に甚だ難偏なる文書の用ひらるゝことは頗る遺憾とする所である。現在の趨勢に於ても、口語文は日々其の領土を擴大し、時文體及び書簡文體等は次第に萎縮して行く傾きがあるのであるから、此の趨勢を更に人爲的に促進し、以て事務の簡捷と、教育の容易とを計るべきで、此は國民の知識の進歩の爲に國家として關心するに足る問題であると思ふのである。

(「家庭週報」第二百九十四號) 大正三年十一月

希望ある門出

櫻楓會慈善音樂會の終了

今は戦時、人心の引締つた時である。社會一般の經濟界は不景氣だと云つて居る時である。殊に極月半ばの時期に、音樂會を催すといふ事は、たとひそれが慈善の爲のものであつても如何なものであらうといふ事も問題であつた。又其の目的を一度の音樂會で達するといふ事も出来ないであらうと考へて居つたのであるが、それが案外に盛會であつて、さうして目的以上に成功したといふことは、櫻楓會員の一致協力と、櫻楓會及びこの事業に多くの人々が同情し贊助せられた御蔭で今更に感謝に堪へぬ次第である。

今回の音樂會開催に就いては如上の如く戰爭中でもあり、殊に未だ諒闇中の事でもあるから、この催しはたゞ慈善の目的を達するばかりでなく、音樂會それ自身が今日の社會の要求に適當なる何物かを與へなければならぬ。即ち其の内容が精神に充ち、其の發表が時宜に適ふ様になるべきであるが、又同時に來會者の興味を満足させることも、忘れてはならぬ一條件であるから、この目的と、その手段とを一致させるといふ事は最初からの六つかしい問題であつた。併しそれも實に都合よく結末を告げることが出來たのは、櫻楓會の日頃主張する所の精神が凡てのものに貫徹して行はれ得たといふことを喜ばねばならぬ。出演者も亦この一種の精神に共鳴し、溢るゝ熱誠が其の堪能なる技に表れて全場を壓するの概があつた。來聽者は其の堪能なる技に酔ひ、その雰圍氣に接して何物か一種の印象を與へられて、欽然として好意を表せらるゝといふ有様であつて、實に音樂會には珍しい精神の發表を見ることが出來たのは、これもこの會に關係せられたる人々の眞面目なる態度の賜であると思ふ。

兎に角この催しが動機となつて從來の託兒所が發達するばかりでなく、今後將に我が國に必要となるべき労働者の兒童教育、及び其の家庭改善の事業が益々擴張せられて、其所に櫻楓

會の大なる使命が全うせられることと、及びこれに同情せられたる人々が益々かういふ事業に興味を向けられてその發展を助力せられんことを希望するのである。一言所感を述べてこの同情者に謝意を表し、併せてこの事業の門出を祝ふものである。

〔家庭週報〕第二百九十九號）大正三年十一月

教育と信念涵養

兒童及び青年に於ける信念の發生及び涵養方法

信念の意義

是處に謂ふ所の信念とは既成宗教に見るやうな、特殊の信條又は儀式等の形式を指すに非ずして、一切の宗教の本質であり、道德の根本たる所の精神をいふのである。此の精神は人格の根柢となり、教育の出發點となり、犠牲献身の行爲の原動力となり、人道、愛國、義勇、忍耐等の諸徳の本源となるものであつて、凡そ人たるものゝ必ず當に具へざる可からざるもの、又凡そ人として其の萌芽を具へざるはなきものである。此の諸徳の根柢たり、諸行の動力たるところの信念あつて、始めて獨立の人格は成り立つ。若し之を缺かば、恰も動力の止まつた機

械の如く、人は活ける人格の體面を失ひ、唯紛々たる末梢的の感情と知識と行爲との群衆體たるに過ぎないものとなるのである。従つて此は狭く一宗一派の宗旨や信條等を以て限らるべきものではない。汎く東西古今を通じて凡そ人格者としての人と共に其の生命として、必ず常に存するものである。

信念の發生と其の發達

(イ) 精神發達の段階と宗教的本能

信念の内容は人の全精神であつて、之を要素として分つて言へば、知、情、意ともに圓滿なる發達を遂げ、其の調和統一した處に信念は成り立つのであるが、其の主たる根柢は、廣義にいふところの感情である。而して此處にいふ感情とは宗教的の直感、情緒、態度、動機等の心作用を指すのであつて、之を總稱して、宗教的本能といふのである。

此の本能の由來は長き生活の間に連續生育し來つた人類的遺傳であつて、之を其の本源に遡つて見れば、實に生命其の者からの流出たるに外ならぬ。従つて此の本能は人類の進化と共に、永遠に生長し、人格の種子となつて、外界の刺戟を受けるに従ひ、次第に發展し來るのである。

個人に於ける宗教的本能の發展する順序は、大體に於て人類

進化の順序と一致するものであつて、人類が過去の永き生活の間に通り來つた其の經驗を繰り返すのであるが、其の上に又個人自己の生活に依つて、新たな意義と形式とを創始するのである。これ發生心理学、兒童心理学、人類學等の研究の結果を總合したる概観であつて、宗教的本能なるものは決して偶然な一時的、局處的なものでなく、其の淵源するところ、人類の生活と共に實に頗る遼遠なものであることは明らかであると思ふ。

人類學によれば、人類進化の段階を分けて、原始時代、未開時代、半開時代、文明時代とするのであるが、幼兒から成年に至る個人の發達も亦此の如き段階を経るものであつて、年齢に依つて之を分てば、幼兒時代、兒童時代、少年時代、青年時代、成年時代とすることが出来る。而して信念の發生は、此の段階の何れの時代であるかといふに、先づ其の精神發達の順序を概観すれば、左の如くである。

三——六歳 此の年齢の間は之を名けて應化時代といふべく、主として模倣に依つて、自己を外界に應化せしめるに努めるのである。即ち社會化を主とする時代である。

六——十二歳 此の時機は之を名けて同化時代といふべく、自我を主として周圍の社會を自己に同化せんと努めるものであ

る。即ち個人的立我を主とする時代である。

十二——十八歳 此の時代は即ち自覺及び天職確定の時代であつて、此の時期になれば、之まで渾沌として明らかでなかつた理性は漸く其の光を放ち始め、之によりて人は此處に自己の姿を見出し、自己の歩める路を見出し、臍氣ながら自己及び自己と社會との關係と云ふことを覺るに至るのである。

十八——二十五歳 此の時期は之を確信時代と稱すべく、自覺及び使命の觀念の漸く明らかになると同時に、其の價値の根原に關する判斷を確立し、精神の實質に於ては知、情共に發達して實行的意志に統攝せられ、至高至善の判斷と結合して、此處に信念を作るに至るのである。

以上の如き發達の間に於て、吾人は皆無意識的本能的に、祖先の爲したる経験を繰り返し、之を一生の生活に再現せんとする衝動を具へてゐるのである。此の祖先の経験の反覆再現は即ち吾人の遺傳であつて、其の發展は忠孝となり、愛國心となり、人道となり、宇宙的博愛即ち宗教等となつて分化して來る。此の遺傳の發現は、始めは想像力に依つて、人の精神内に神祕的に動いてゐるが、次第に發達して、理想を生み、公準を求め、信條を構成するに至るのである。此の如き心的發展の傾向は、先天的に人類に具はるものであつて、之を稱して宗教的

本能と云ふのである。信念涵養の問題を論ぜんとするに當つては、必ず先づ此の事實を認めなければならぬ。

兒童の宗教的本能の發達は前述の如く人類の全経験を繰り返すものである。その最初の發現は原始時代に於て見るものと同様の形式に依り、神話的崇拜心として出て來るのである。即ち兒童は岩石、樹木、動物、日星等の自然物及び種々の自然現象を人格化して、之を崇拜するので、兒童は常に自然崇拜者である。兒童はかくて自然物を見るに單なる物質を以てせず、自己と等しき生命ある活物として接應し、精神的交通を爲すことを欲するものであるから、之に依つて思想上、感情上に深き感化を受け、此處に漠然たれども、然も廣大なる宗教的信念の萌芽を作るのである。兒童にして若し自然と同情同感する性情態度を具へなかつたとすれば、宗教心の發現は不可能であるかも知れぬが、事實上、兒童は、宗教心の萌芽なる、自然に對する感應、崇拜の性情を有すること前述の如くであつて、其の外界の刺戟に應じ、適當の経験をつむに従つて、次第に高尚なる宗教心を形成するに至るのである。

信念は前述の如く、人の心の中よりして自發的に起り來るもので、外より注入的に教へることの出來ぬものである。ポローの言に『ポローは植ゑ、アポロは灌ぐ、されど之を成長せしむ

るものは神である』と云ふことがあるが、實に宗教的信念は人工的に製造したり、注入したりすることの出来ぬと同時に、又遺傳と天賦の力とに依つて、先天的に人の精神内に湧き出るものであるから、吾人は此處に宗教的信念の養成を爲すべき鍵鑰を捉へることが出来るのである。又此の如き萌芽の認めらるゝ以上は、吾人は是に適當なる刺戟を與へて、其の發達を正しく導き、且十分に醇熟させなければならぬ。恰も身體に於ける營養本能の活動に適當なる食餌を供給して、其の要求を満足せしめ、以て身體の健全なる發育を爲さしめると同じく、宗教的本能にも亦、適當なる材料と境遇とを供給して、其の欲求を満足せしめ、是をして充分且正當なる發達を遂げしめ、以て高尚なる信念に依つて、確乎たる精神的基礎を作ること努めしめることは、決して無用なる強制でなくして、教育當然の事業であると言ふ。

(口) 宗教的本能の發達と其の要件

宗教的本能の發達は之を三方面に分解することが出来る。

第一、向上的要求 或は自己發展の要求ともいふべく、或は自己の性情を善美なるものに醇化し、或は自己の高尚なる本質を開發し、低きより高きに向つて歩々進達し、遂に完全なる理想、人格を現成せんとする努力の傾向を指すのである。近代の

所謂超人、佛教の所謂大我も亦此の欲求の究竟たる理想境を指すに外ならずして、此處に到達せんとする飛躍を宗教に於て復活と稱し、教育に於ては自己發展と云ふのである。

第二、自己犠牲の要求 これ或は奉仕的要求とも云ふべく、他愛的熱情の爲に自我を滅没してそこに満足幸福を感得するものにして、或は同情感激の爲に身を殺し、或は愛國心博愛心の爲に献身し、以て個人的自我を立するよりも更に深大なる生活價値を建設するのである。之を主觀的に概言すれば、即ち小我を殺して、却つて大我に生くることに外ならぬが故に、これ亦一種の復活であり、自己發展である。

第三、根本的要求 或は之を究竟的要求とも、超絶的要求ともいふべく、地上にある一切の平等相對の關係を超越し、その究竟絶對の境地に於て、生命の本源、或は絶對精神、即ち神と一體となり、全宇宙的精神生活に入らんとする欲求であつて、人の向上心は此の欲求を満足せしめる事が出来なければ他の如何なる幸福をも幸福とせず、一度此處に到達すれば、他の如何なる窮乏をも窮乏とせぬのである。これ即ち自己生存の絶對的價値を建設せんとする欲求であつて、其の充實は最も大なる復活であり、自己發展である。信念の核心となり、向上の努力の至上目標となるものは之に外ならぬ。

宗教的本能の發展の本質たる自己發達、自己犠牲、及び絶對合一の三要求に對して之を満足せしむる刺戟を與へ、其の成長を助くる材料を供給するものにも亦種々あるのである。

第一は人格であつて、即ち母、乳母、教師等の精神的態度である。

第二は家庭、學校、國家等の社會的人格であつて、其の内に瀰漫する雰圍氣、乃至時代精神、或は歴史傳説等に現るゝ一種の精神的勢力である。

第三は天來の感化であつて、教授傳習等の社會的相互交渉以外、之を絶する所に於て、自然の感化に觸れ、理想の絶對内容を直覺するのである。故に之を稱して天の啓示といふこともある。

凡そ此處に要求あれば、必ず彼處に之に應ずる對象あり、兩者相觸れ、相結ぶところに宗教は成立するのであつて、これ實に一切宗教の起源であり、且つ本質である。此の精神的現象を分けて、之を要求の方から言へば、即ち憧憬であつて、之を反應する方よりいへば即ち感化である。此の感化を與ふる材料となり、以て信仰の要求に應ずる對象に接せしめる仲介者となる所のものには、前述の如く、人格あり、歴史あり、文化あり、思想あり、自然現象あり、内在的大靈あり、各個人の年

齡、性質、能力に従つてそれ／＼其の要求を満足せしむる作用を爲すのである。此の如き材料と境遇とに依つて、適當の刺戟を與へ、以て感化を受けしめ、先天の宗教的本能を發展せしめるのが、即ち信念涵養と云ふことであつて、眞の宗教教育と云ふべきは、此の外にはない。此の見地よりすれば、兒童より成年に至る個人發達の各時期に於て、信念涵養の爲に、それ／＼適當なる材料と境遇とを提供するを必要とすべく、又提供することが可能である。従つて又信念涵養といふことは、家庭、學校、社會に共通して、一日も廢すべからざる教育の重要方針と爲し、各時期、各方面、適當なる方法に依つて相協力し、以て道徳と教育との基礎、健全なる人格の根柢を作らなければならぬ。

信念涵養の方法

(イ) 精神生活と象徴主義

凡そ人は幼兒より次第に發達し其の精神活動著明となるに従ひ、物質的自然界より進みて、超自然の世界を發見し、内外兩界の生活を營むに至るものである。而して其の外面の自然現象界の組織を知るが爲には、常識と科學とによりて研究するのであるが、内面に於ける精神的實在界の消息を明覺するには、象

徴的方法によつて感應し直覺するの外はないのである。又各自が經驗する精神生活を外に表出するにも同じく此の象徴的方法に依らなければ満足することが出来ぬ。故に信念涵養の方法は主として象徴主義に依らなければならぬのである。

抑も象徴主義の特質とするところは、部分よりも全體を重んじ、形式よりも内容を重んじ、表面よりも徹底を重んじ、事實よりも意味を重んじ、機械的説明よりも洞察達觀を重んじ、理智よりも情意を重んずるのであるが、紛々として、變幻窮りなき外界現象の惑亂を脱却して、直ちに生命の眞義に徹するの道は、唯此の如き象徴主義の特質に在つて存する。かの文藝、道德、教育、宗教、その他一切文明の本質的要素となるところの究竟精神は、即ち此の方法に依つて其の發展飛躍を致すことを得たのである。

此の象徴主義を信念涵養に應用するに際しては、其の取材の範圍を一方面に偏せしめることを避け、文藝、道德、宗教、教育一切の象徴を包含したる、徹底的完全なる象徴主義を採用することを要する。

(口) 象徴主義の起源と發達

象徴主義は近代の文藝界、思想界に於ける重要な題目となつてゐるが、併し其の起源は極めて遠く、決して近代に特發し

た一時的の流行ではない。實に人類に宗教本能の萌した時に既に同時に各自の精神に宿り、民族の文明と共に社會に發生して、長き歴史の中に一大潮流を爲して發達し來つて居るのである。今其の起源及び發達の梗概を述べて見よう。

抑も人類文明の發生は一地方に限らざるも、其の中心の先驅者はナイル河畔に發生したるエジプト文明なることは既に世に明らかなことであるが、而も其のエジプト文明の根柢が宗教的信念と象徴主義なることに至つては、近頃になつて證明せられたことで、全く古物學者が研究の成果である。アツシリア古物學教授セース博士の報告によれば、今日に於て、吾人文明民族の抱いてゐる宗教思想は、其の由來する所、古代エジプト人に負ふことが頗る多いのである。即ち古代エジプト人の文化信念が流れて印度の祕密教となり、アレキサンドリア學術を生み、基督教の形而上學的神學を生み、科學に於ては、ダーウインの進化論を生み、又ヘーゲルの哲學を生み、遂に今日の象徴主義を生んだのである。又各宗教に通じて見られる三位一體說、殊に神を父位とし、母位、子位を之に配する見地、人間元同根より生じ互に兄弟たる思想、生命不滅の概念は、既にエジプト思想に現れてゐたのである。

此の如く後代人類が萬有に内在する永久不滅の實在の觀念を

捕捉する様になつたのは、主としてエジプト民族の頭腦に依つて開拓誘導された點が多く、此の實在觀念を中心とし、靈性の明覺を欲求する前述の諸教學の酵母は彼のナイルの谿谷に於て、醗酵されたものといはなければならぬ。セース博士説を爲して曰く、エジプト人を正しき飛躍に導いた其の象徴主義は、次第に空なる習慣に捉はれ、徒らに過去の形式のみを過重するやうになつたが爲に、象徴主義本來の權威を失つて、物質主義の勢力に敗られ、其の結果、エジプト文明は遂に枯死するの止むを得ざることゝなつた。然れども、エチプト人の手中から落ち零れたる種子は、其の皮殻たる文明と共に枯死せず、歲月と共に其の生命の芽を開いて、遂に今日の教化文明の源を爲したのである。現代に生存する吾人は即ち過去文明の繼承者たるに外ならぬものであるが、其の繼承せる文化の大部分は實にエジプト人の創始に係るものなることを忘れてはならぬと。

吾人の見る處によれば、此の古代エジプトに發生した宗教的信念は、別れて二大潮流を爲して發展廣布したのである。其の潮流の一は即ち東洋教學、他の一は即ち西洋教學であつて、其の源を同じうするが爲に此の二大潮流の間には象徴を通じて屢々融和結合の運動が起つたのである。之を例するに、日本の神道は其の象徴の取扱ひ方に於てエジプト、バビロンに在りた

るものと酷似する所がある。支那の儒教にも亦符合した思想があり、最も象徴的なる印度の祕密教に至つては、其の内容殆ど一致してゐることを見るのである。又西洋文明の眞髓を爲したものは、ギリシア、ローマ、ヘブライの三大教學であるが、是等三大教學の起源は同じくエジプトの象徴主義に在る。而して彼のアレキサンドリア學派の如きは、象徴主義に於て屢々此の東西教化の調和融合に努力する所があつたのである。

初期クリスト教も亦ヘブライ、ギリシア、ローマ等に發達せし思想と象徴に依つて融合し又之を受容したことが多いのである。基督教に用ひらるゝ象徴の中の重要なもの、即ち聖晩餐式、十字架、安息日、其の他を守る事等の諸儀式は必ずしもクリスト教本來の象徴ではない。他の宗教的儀式であつたのであるが、其の價値の適切なるが爲に、クリスト教が之を取り入れ、以て其の宗教的意義を表示する象徴としたのである。即ち是等は象徴としての價値を最もよく發揮したものであつて、之によりてクリスト教は他の宗教との間に共通する眞理を理解捕捉し、以て互に相調和することを得、又之に依りて他の教化の要素を採取して、以て自教の内容を豊富にし、整頓することを得。たとへ互に相一致することの出來ぬ思想信教と雖も、全くは排斥せず、却つて其の新要素を己に同化することが出來た。

此の如きは初代キリスト教の採りたる宣教の方針であつたことは、基督教學者の研究に依つて明らかにされたことであるが、之は全く象徴が靈性表示の唯一形式たるが爲であつて、此の傳道主義を保つた基督教が諸教學思潮の統一融和に對し、頗る寛容な態度を持し得たのは主として象徴主義の効果といふも敢へて過言ではない。

前述の如く、象徴主義は人類文明の初めより既に發生し、東西の二流派をなして世界各種の文化に浸潤し、而して近世に至りて更に宗教、哲學、教育、文藝等の上に盛んに復興し來り、所謂近代的象徴主義となつたものである。即ち象徴主義なるものは、決して偶然一時の流行ではなくして、人類の精神的發達上必然的價値を有し、長き歴史を以て變化し來つたものであることを知るに足ると思ふ。

(ハ) 象徴主義の價値

象徴の要義とする所、價値の存所は種々の點から考察することが出来るが、左に其の主たる數項を擧げて見よう。

第一、象徴主義の特色とする處は、既述の如く、物の眞相眞義に徹して、局部より全體に亘り、有限より無限に進み入らんとする、人の根本的要求を満足せしむる方式たるが故に、其の要義とする處は調和、融合、統一といふことに存する。即ち

種々の民族信教の間に立つて、其の内實的融和を誘導するに力め、殊に東西二大文明を調和せんとしたる運動は前に略述した通りであつて、蓋し將來世界の平和問題を解決する鍵輪となるものは、此の象徴主義に外ならぬと思ふのである。

第二、今日の文明は過度に物質的、機械的、形式的、習慣的にして煩瑣細屑の間に人格的生命を窒息せしめんとするものがある。此の繁縛なる束縛を破つて人格の呼吸、愛の自由を得しめんとする運動の中心たるものは即ち象徴主義である。象徴主義は人をして空冷なる感覺的自然的の現實主義を超越して、暖き生命に於て復活せしめる唯一の方式である。

第三、最高の生命を憧憬讚仰し、其の感應靈化を受けんとする方式乃至態度、これ即ち象徴主義であつて、人をして宗教信仰の本質を捕捉せしめ、且又宗教に神祕なる壯嚴性を帶ばしめる要點である。

第四、全く靈的要求を無視し、何等精神的意義なき皮相の機械的文明に對して靈性の權威を樹立し、精神的生命を鼓吹し、機械物質を醇化して、以て眞の人類の文明を産み出さんとするものは此の象徴主義である。又此の如き眞文明を成就するが爲に、各人をして其の精神的要求に於て徹底したる自己發展に飛躍せしめるものは此の象徴主義である。

(二) 象徴主義の様式

象徴主義の運動中、最も長き歴史を有し、而も將來に生命を有して、近代に再興せんとしつゝあるもの、且吾人の教化修養の運動上、多大の學ぶべき特色を有するものは、蓋しフリー・メーンソリー（自由石工）の運動であらう。

フリー・メーンソリーの起源は頗る古く、其の源流は同じくエジプトの象徴主義である。而して此の運動の創始者と見るべきは彼のピタゴラスであるが、彼は紀元前五百八十六年に生れ、屢々エジプト、アフリカ、アジア等の間を往來して、古代文明思想の眞髓を探り、其の組織したる哲學上の見地から象徴主義を建設したのである。ピタゴラスの人格、信仰、知識の何れから見ても、皆フリー・メーンソリーの運動に出發點を與へてゐるのであるが、其の哲學説の根本觀念を見れば、一、神性の觀念 二、靈生の不滅 三、人類同胞の觀念、を以て主と爲すもので、而して之實にフリー・メーンソリーの根本義であるのである。

フリー・メーンソリーの社會的運動として初めて實際に行はれたのはローマの第二帝王ヌーマの時代であつて、帝國內にある異人種、異宗教を調和統一せんが爲に、廣き人道の上に於て協力融合することを目的として組織を興したのである。その

團體の名を『カレージア』と稱したのであるが、矢張りフリー・メーンソリーの意味である。

フリー・メーンソリーの根本思想は前述の如くであるが、更に其の根本思想から發展した特徴を擧げて見れば、主として左の如きものである。

第一、調和即ち人の精神の本質眞髓に於て相一致すること

之を外形より總括すれば、即ち人類同胞主義であつて、人は其の種族宗教を異にするも、其の本源の生命を一にするものであるから、此の一點に於て、世界の何人も一致共同することの出来るものである。又何人も宗派宗教を超越し、其の宗派宗教の本質たる至高精神に依つての生活を經驗することを得べく、此の見地からして醇化され、總ての信條は各々其の特長を失はずして、究竟全一に歸すべきものであるとするのである。而も亦同様の見地から、各人相互に他の信念を尊び、己の所信を主張して強ひて他を妨害するが如きことを爲さず、各自の程度に於て理解し得る共通の最高善に於て相一致し、交々他の信念を生育せしめ、害惡となるべき部分を排除するに力め、以て互に本源に向つて生命的最善の發達進歩を爲すことに專念するのである。フリー・メーンソリーの世に行ひ易いのは、此の如き寛容にして篤厚なる主義に依るものであつて、吾人の最も參考とす

べき點と思ふのである。

第二、種々の象徴を重んじて、而も最も適切に其の價値を發揮すること 象徴は人の精神的活動に對し、甚だ重要な役目を負ふものであつて、人が其の信念を外に發表するには、此の象徴を假りてしなければならぬ。又宗教の組成も象徴に依らなければならぬ。然れども、象徴の價値の斯くも重要なが爲に、之に對する人の多くは、此の象徴即ち種々の信條儀式等が即ち直ちに生命精神其のものなるかの如く思ひ誤り、之に囚へられて却つて眞の生命精神を捕捉する能はず往々邪路に彷徨するに至ることがある。之實に象徴に伴ふ教學界の大弊であつて、各種の宗教教學の屢々其の本旨を誤り傳へられ、人を救はずして、却つて害毒を世に流したのは、此の弊に基くことが少くないのである。然るにフリー・メーションリーに在りては象徴を重んじつゝ、然も象徴に囚へられず、象徴は最も貴重なるも、而も象徴は只象徴にして、到底、絶對、實在、生命、神其のものに非ざることを理解し、之を以て向上精神の仲介將た階段として、之に依つて全力的の献身を爲しつゝ、同時に歩々之を脱却することを念とすると云ふことは、其の重要な一特色であつて、之亦吾人の學ぶべき所である。

第三、各個人の向上精神を以て本義とすること フリー・メ

ーションリーの旨意によれば、各個人は一の大なる人格的殿堂を構築する材料たる生ける石材である。此の殿堂は世の普通の殿堂の如く、唯殿堂として機械的に造營裝飾すべきものでなく、又爲し得るものではない。各個人の人格の靈性的調和結合に依つて自ら構成されてゆくものであるから、その材料たる各個人が向上するに従ひ、其の品性の研磨されるに従つて其れと共に殿堂は自ら擴大され、裝飾は自ら壯麗美麗となるのである。それ故に各人は自發自助、自立自治の精神を以て常に自己を強大にし、自己を充實することに力めなければならぬ。即ち常に向上發展に力めて、念々須臾の間も怠つてはならぬ。其の向上發展は永遠的であつて、人格的生命に於て徹底する迄止めることは出来ぬ。而も同時に最も確實健剛なることを要するが故に決して偶然的一時的の頓悟飛躍を僥倖してはならぬ。必ずや極めて嚴密なる規律の下に、秩序的に歩々階段を登り、次第を以て其の修養的水平面を高めて行かなければならぬ。(フリー・メーションリーの規定に於ては三十二の象徴的階段を置く) 其の經過の遲速成績の如何は人々の天賦の性質如何に依つて差等を生ずるのであらうが、それは少しも問題ではない。各人は他との同時的比較の成績如何に關心することなく、唯其の全力を盡して常に向上精進し、歩々確實に成徳の階段を登つて永遠に連り

ゆけば、それで人の務めは盡きるのである。人生の價値は其の一時の形式的成績に在らず、内實に於ける永遠的努力に存するのである。此の如きフリー・メーンソリーの趣意も亦今日の向上的努力の要求に適合する方式であると思ふ。

第四、愛國心を本質的に養成する事 フリー・メーンソリーに於ては、本質的精神態度に於て、究竟至極の愛國的人格を養成するのである。即ち自己を獻げて全體を充實し、個人を犠牲にして團體の人格を構成するのが肝要なことになつてゐる。其の修養其の努力は、單に個人の自我を善美にし擴大するを目的とするのでなくして、自我を善美にし擴大するのは、之を獻じて以てソロモン堂（ソロモンはエジプト語では太陽）即ち宇宙、天、神の宮を築かんが爲である。同じ意味に於て、自己の國は即ち自己を獻じて以て之を構築し、之を裝飾し、之を理想的に充實すべき宮である。國民たる各人は其の國に對して一の石たり煉瓦たり鐵材たるべきもの、即ち理想的建國の材料であると思ふ。此の積極的建設的な、而して眞に道義的の根柢を有する愛國心養成法は、又今日の吾人の學ぶべき要點であると思ふ。

第五、自發的の實勞實働を以て修養の内容とする事 フリー・メーンソリー（自由石工）の名稱が明らかに示してゐるやう

に、勞働を重んじ實際の努力と成績とを以て自ら進み又全體に貢獻するのである。文學や言語を以て濫りに他に勸説することを以て他を救濟するの能事終れりと爲し、又唯概念の系列を整へて以て己が修養の事成れり、とするが如きものではなくして、どこまでも實行的である。精神と筋肉と、即ち心身の全部を勞作に集中して、具體的の成績をあげる、それが同時に修養であり、又奉仕である。此處に高きものにも低きものにも、亦知識あるものにも、知識なきものにも共通して、一樣に、而も最も堅實に實現せられる本旨が存するのである。而して其の勞働たる自由である。決して奴隸の如く他に強ひられ、束縛せられて餘儀なく機械的作業を爲すのではない、自己の本心より自發的に進むのである。自由意志を以て自ら選んだ目的の爲に、義務の爲に働くのである。獨立自治、自律的奮闘である。自己の爲に全體の爲に神聖なる勞働に全力を盡すのであつて、即ち之最も勞働神聖主義の眞義を得たものである。之又吾人の學ぶべき特色であると思ふ。

第六、相互救濟愛護の趣意が理想的に實行せらるゝこと フリー・メーンソリーに屬する者は、皆實地の勞作を以て全體に貢獻すること前述の如くなるが、その勞作たる箇々秩序無統一に爲さるゝに非ず、各自の程度に應じ、全體を組織するそれ

／＼の地位に依り、全體に對する役目として其の箇々の義務を遂行するのである。而もそれは宗教的職業の如く、之に依つて何等かの報酬を得ることを豫定して勞作するに非ずして、全然全體に對する貢獻であり、奉仕であり、犠牲である。従つて之を加盟員の相對關係から見れば、加盟員は總て之同家同庭の兄弟であつて、此の兄弟を愛育し、長養せんが爲に自己の持てる力を獻ずるのである。精神的に將た物質的に他を救濟せんが爲に己を獻ずるのである。己も亦賜物を受けることがある。それは己を安くせんが爲に私意を以つて分け取るのではなくして、止むことを得ざる場合に、公に全體から受けて感謝と共に其の精神を奉戴するのである。即ち共存同衆の意義、相互扶助の精神が理想的に行はれてゐるので、一面絕對的自由の態度が重んぜられると同時に、一面徹底的の共存の態度がある。これも大いに學ぶに足る特色である。

第七、世間的團體に非ず、又宗派的結合にも非ざる理想的精神的團結なる事 フリー・メソソニーは、事業或は學術或は修養を目的として世間普通に設立されてゐるやうな社會的團體ではないと同時に、一宗一派の教條儀式を信仰するが爲に結ばれた團結でもない。超人類的、超自然的、而も普遍的究竟的の神性、或は宗教的信念を以て其の根柢とし、目標とし、生命と

する最も自由廣汎の意義を有する精神的團結である。各個人は其の地位、職業、知識、信教、種族等を總て超絶して夫等以上、人間全體の普遍共通の生命たる靈力を認識し、之を以て各箇を連絡する唯一の繩索として、之に頼つて相結合して、而も以て渾然として最も、堅固なる純潔なる寛容なる溫暖なる一體を爲してゐるのである。之眞生命のあるところ、公明謙虛、誠實篤厚なる態度に依つて之を認識する限り、宗教宗派に依らずして猶理想に近い精神的修養團體を造ることの出来る例證であつて、吾人の頗る顧みるに足る事と思ふ。

フリー・メソソニーは最も常識的で、堅實で、且つ最も實行し易い。而も深遠なる趣旨を有する象徴主義の運動として此處に擧げたのであるが、此の如き方法に依れば、必ずしも既成の宗教派に依らずして、學校に於ても社會に於ても、教育として信念の涵養を爲すことが出来る。迷信に囚はれ形式に陥るの弊なく、又修養と云ふ事を徒らに文字口舌觀念上に止めるが如きことなく、精神と行爲とを一貫して、眞に教育の動力、生活の價値を設定することが出来ると思ふのである。

(ホ) 日本女子大學校に於ける實例

自分は信念涵養に就いて今此處に一般に施行することの出来る様な細案をば有して居ないのであるが、併し一種の具體的方

法として多少の参考材料となるかも知れぬし、又自分としては此の方法の效果に對する證明になるやうに思はれるから、諸君の許容を得て、年來我が日本女子大學校に於て實行し來つた事項の概要を此處に述べて、各位の批評と教示とを請ひたいと思ふのである。

我が校に於ては信念涵養の爲と言つて格段の儀式を設けてゐるわけではない。唯普通の生活、諸種の會合、及び音楽等によるもので、一般的人格養成の方法たるに過ぎない。けれども其の實質に於ては、總て常に究竟の目的として本源の生命に觸れ、絶對の信念を確立することを以て精神としてゐるから、神道信者も佛教信者も基督教信者も儒教其の他の倫理主義の信者も皆一緒になつて、共同の修養に努力すると同時に、又普通の宗教に見るが如き熱烈なる祈禱の精神にもなり、復活の状態をも示し、改悔もし、感謝にも充つことが少くないので、日常生活を純粹高潔なる宗教的空氣の中に浸し、其の涵養に依つて、次第に信念を養ひ、人格を爲すに至ることはその自由にして且倫理的なるだけ、或は却つて形式即ち特殊の教條と儀式とに依つて限られた既成宗教に勝る點がありはせぬかと思つてゐる。

第一、人格の感化 人格に依る感化即ち人格の力に依りて他

の之に接觸する個人を鼓吹し、示唆し、誘導し、化成することは一切の精神的運動の中心であるが故に、我が校に於ては最も此に重きを置くのである。即ち寮舎に於ては寮監、學級に於ては指導者と云ふものが、修養生活の中心となつて、直接に學生の指導に任じ、個人的接觸に依つて、感情思想目的の融和を計り、人格と人格との互助互長に努める。又一般教師の人格的勢力も學科研究の指導の間から迸り流れて、學生が精神を培養する糧を供給し、更に特に熱心にして既に確信を得たる學生が其の下級のものを親切に教導する其の影響も亦甚だ多大である。此等の個人相對間の人格的感化は社會の實生活に於けるが如く、利害關係其の他の複雑なる羈絆を有せざる學生生活に於て行はれるのであるから、比較的純粹なる精神的効果を奏し、往々特殊宗教に見るが如き熱烈なる光景を現すことがある。

第二、校風の感化 校内に於ける各人員各機關が同一の主義目的に向つて共同の働きを爲す。其の過程と共に相合成して以て一全體の雰圍氣を作り、又此の雰圍氣が各人員各機關を圍繞する精神的環象となつて、以て彼等の心身に浸潤し、之を一に融和し、各人各機關の人格的涵養を計ると共に全體としての向上に努めるのである。此は實に至難なる事業であるが、各員各機關の全體が此の共同の主義を意識して努力しつゝあるので、

往々著しい感化の効果を擧げることがあるやうである。全體の水平面が歩々高まると共に各個人は之に伴つて屢々覺醒し、實に一個の倫理的教會とも云ふべき徹底したる宗教的緊張の状態を示すことがある。

第三、實踐倫理 校風を作り之をして究竟的方面に進動せしめるが爲には、之が統一中心となり、誘導の先聲となり、以て人格的生命に結晶せしめるところの核心がなければならぬ。我が校に於ては之に對して實踐倫理の時間を宛て、居る。此の時間に於ては學生の奮發と覺醒とを促すが爲に常に問題を提示し、思想を啓發し、興味を鼓吹して、歩々精神の努力を誘導すると共に、全體の向ふ所を掲揚するのである。學生は全體の校風の無意識的涵養を受け、又個人の人格的感化を受けて、更に此の實踐倫理に依つて刺戟せられ、覺醒の暗示を受けるが爲に、屢々形式的宗教に見るが如き高潮した感激を以て改悔、了悟、復活の精神的躍進を示すことがある。此等の際に於ける精神的覺醒或は意識の轉換が新生命の道を開き、信念を捕捉する光を與へ、卒業後の實生活に於ける安心立命の基礎を爲したことが少なくないのである。予は之等の經驗に依つて、宗派に依らざる普通の生活の間に於て、形式宗教の示すが如き信念を養ふことの決して不可能ならざることを固く信ずるのである。

第四、諸學科に對する態度 總て學科に於て事物の究竟原理に到達せざれば止まないといふ追求的興味を養はしめてゐる。又歴史、傳記、自然研究其の他の學科に於て敬虔にして嚴肅なる宗教的感情を涵養することに勤めてゐるが、總ての學科凡ての作業に於て信念涵養は可能であり、又眞の知識、眞の能力發展の爲に缺く可からざるものである事を信ずるのである。

第五、瞑想の時間 我が校の寮舎に在る學生は毎朝起床後十五分の瞑想時間と云ふものを持つてゐる。此の時間に於ては、決して特殊の儀式を課するのではない、唯深く精神を統一集中して自己の主目的とする所に従ひ、或は宇宙的精神との交通感應を経験し、或は團體乃至個人との全體的精神的關係を省察する等の事をするのであつて、其の精神統一集中の手段としては、或は祈禱するものもあらうし、或は坐禪するものもあらうし、或は深呼吸を爲す者、何か文章を読む者、自然に對して凝念する者等種々あるであらう。要するに、自發的に全心身を傾倒して究竟の信念に到達する努力を專一にするのである。此の間は全く他力宗に於ける祈禱、自力宗に於ける坐禪或は觀想と同じ様なものであつて、信念を定め、人格を養ひ、教育の根本効力を各自に獲得せしめる上に少からず効果あるを見る。

第六、各種の修養的會合 會合の種類には各學部各學年の組

の會、各學年を縦に重ねる會合、各學級を横に連ねる會合、諸係の會合、寮舎の會合等數多ある。或は共同の研究を試み、或は互に經驗を話し合ひ、其の間に意志の疏通、思想の理解、感情の融和を計り、且つ相互に刺戟し、矯正し、誘掖し合ふのであつて、屢々宗教的會合に於けるが如き興奮緊張を示す事がある。又其の他の全校の會合時、例せば國祭の儀式の時等に於ても、單に儀式的會合とせず、成るべく精神的價値を充實せしめることに努めてゐる。『君が代』を歌ふにも唯音楽として聲の旋律を奏するのみに止めずして、君に對する至情を味識しつゝ、其の感情を表达する様にする。勅語を奉聽するにも、唯文字を辿り讀む態度でなく、文字を以て一の象徴と見て、其の象徴に依つて啓示されたる民族精神、帝國の生命に思ひ到るやうにすると云ふが如く、總て、事々物々を精神的象徴と見て、之により之を通じて爲し得る限り、深く純粹に、歩々信念に到達せしめる趣意で實行してゐる。此の際に於て、全校深き感激に撃たれることもあるので、此の信念此の感激の間に眞の愛國の赤誠が醸されてゆくのである。

第七、質問會 此の會合は學生の胸中に起る懷疑、煩悶、要求、憧憬に就いて、自由に其の問題を打ち明けさせ、之に對してそれ／＼適當の指導を與へるのであつて、或は直ちに説示し

或は疑問の要點を指して更に自から省察研究せしめる、或は相互に指摘せしめるやうにし、如何なる要求も其の眞摯なるものたる限り、妄に之を壓伏遮止するが如きことをせず、各自の個性、天賦の傾向、事情境遇に應じて、十分なる理解と批判との下に、自ら選擇解決せしめる事を主としてゐる。此の會合に於ては個人的問題、主觀的要求の外、諸種の社會的問題に對する考察批判の指導をも與へて、實生活に必要な相當の見識を社會に對して作らせるやうに努めるのである。

第八、犧牲奉仕の實行 公の爲に私を捨て、全體の爲に箇身を捧げると云ふ精神は、日常生活の實行に於て、養成することに注意してゐる。即ち或は全校に對し、或は自己の寮に對し、或は自己の屬する學級の爲に私利私慾を捨て、熱心に勞作する。又己を捨て、友を愛する氣風を作ることにも努めてゐる。友の爲に身を捧げると云ふのは單に友を讚美し、激勵し、慰藉し、援助するといふ積極的方面のみでなく、神に代り、親に代り、先生に代つて、其の過去を改めさせ、弱點を補足させ、誘惑に陥ることを防ぐと云ふやうな、消極的方面の事をも含んでゐる。而して先生も生徒も共に此の事に努めるのである。勿論、不完全なる者の集合であるから過不及の過はあらう。或は友に媚びることになつたり、或は他を壓迫することになつたり

することの絶無なるは保證し難いのであるが、兎も角、其の精神、態度に於て犠牲奉仕と云ふ貴重なる氣風を養ふことは出来るやうに思ふ。此の氣風の養成はやがて國に對しては純なる愛國心となり、世界人類に對しては人道博愛の大義となる本質で、甚だ重要であるから、平生是處に努力してゐるのである。

第九、櫻楓會 此は卒業生の團體であつて、精神的、物質的の各種の事業を營んでゐるのであるが、前項の如き教育を経て來た婦人のみの集合であるから、その本質に於ては全く精神的奉仕の上に團結し、殆ど教會或は寺院の如き活動を爲すことに總て志を合せ、本部を校地内に置いて卒業生全體の自己發展、修養的生活の中心勢力として立つてゐるのである。

以上は我が校に於て現在實行しつゝある事項中の大略であるが其の成績如何は暫く置いて兎に角方法としては、不完全ながら此の如き手段を以ても信念涵養の目的を學校生活の間に達し得るものであると自信する。而して此の手段は學校教育の目的を妨げず、又國家教育の要求、教育勅語の御趣旨とも一致し、更に一宗一派の狹隘或は迷信に墮せず、各宗各派に通ずる普遍的根底に立つて、確乎たる信念を有する活ける人格を養成するの道たるを信するのである。勿論前に述べた通り、自分の學校に於ける經驗を御話するのは唯多少の參考資料を提供するに止

まるので、若し許さるれば、我が校の教育の爲に將た此の信念涵養、人格養成法の一端の爲に嚴正なる批評と懇切なる教示を請ひたいと思ふからである。

信念涵養と教員

信念は人格の精神内容であるから、之を養成せんとするには、その事業に當るところの教員其の人が先づ確乎たる信念を有し、精神の充實したる人格を具へ、以て後輩を刺戟して、其の宗教的本能を開發し發展せしめるに足るが如き、即ち權威と愛情とを常に發揮し得るものでなければならぬ。次には又教育すべき兒童及び青年の宗教的心理と發達と及び養成方法とに關する知識と經驗とを有しなければならぬ。故に高等師範學校及び大學等に於ては、特に人間の本質、社會の基礎となるべき精神修養的研究を爲さしめる用意を要するのである。歐米に於ては既述のフリー・メーションリーの如き趣意になる修養團體が數多くあつて、社會の裏面に於て精神的充實、個人の長養を計り著しい効果を奏してゐるのであるが、本邦に於ては此の如き社會的修養機關の組織を見ないやうである。先生になつて、後輩に講義をしようといふやうな團體はあるが、總て同じ道を行くところの同胞友人として、互に實行を以て向上精進に献身し合

ふといふ團體は少いやうである。又既成宗教に屬する修道團體はあるにしても、此は或る特定の形式に依つて範圍を限つてゐるから、一般社會に及ぼすことは出來ぬ。是に於てどうしても學校に此等の缺陷を補ふべき設備を特に施さなければならぬ。即ち生活究竟の價値、目的、動力となるところの精神、生命、人格の内容、宗教の本質に就いて研究する一學部を必ず大學、高等師範學校に設け、以て教育の根柢を確立すると同時に、特に此の方面に當るべき教師を養成し、之に依つて教育界の空氣、學風といふものを作り出して、次第に社會一般に及ぼすべきである。

人或は之が爲には既に教育勅語があるから、一層御趣旨の貫徹を計ればそれで十分である、各自に實踐躬行に努めさへすれば、それで十分である、他に別に信念といふものを持ち出すには及ばないではないかといふかも知れぬ。此の種の議論は屢々聞くところである。けれども、吾人は教育勅語の御趣旨の貫徹の爲に信念を要すると考へてゐるのである。國民的生活に現れては、必ず教育勅語に宣せられてゐるやうな道徳となるべき精神内容を各人に充實させる方法を考へてゐるのである。人をして必ず自ら勇躍して道徳を實行せしめ、道徳を實行せずには居らしめないやうな人格的活動原力を各人に具へしめんとする

のである。信念は決して特殊の信條や主義や思想ではない、態度である、精神力の集中状態である、良心の内容である。教育上から見れば、勅語の御趣旨を實踐せしめ、國民たる義務を全うせしめるが爲に、此の如き原動力、根本の態度といふものを各人に培養せしめなければならぬ。従つて之が爲に特殊の用意努力を要すると思ふのである。

信念涵養を助くる方法として、 刻下の状態の下に直ちに行ひ得ることは

第一、教員の態度を改め、此の事業に同情と尊敬とを持せしめることである。従來は宗派の弊を避けんとする餘りに、宗教其のものまで輕蔑して、道義の根本たる信念を確立するといふことを度外に描き、唯形式道徳の習慣を得しめる一方にのみ努力してゐたやうである。之學校の道徳教育獨り盛んにして、青年子弟の品性の却つて浮薄に流れつゝある所以であると思ふ。將來は多數教員の態度を改め、信仰を尊敬し、宗教と協力し、以て社會舉つて國民の精神的生命を充實せしめることを計るやうにせねばならぬ。勿論、之が爲には宗教の方でも、特殊の諸形式のみを頑迷に固執するといふやうなことがなく、其の意義精神を發揮することを主として、各個人の精神人格を養ふ機會

を與へるといふ點に着眼して貫はねばならぬ。徒らに自派を擴張するとか、信者の數を多くするとかいふやうな、宗教の精神とは矛盾するやうな、主我的態度を持してゐられては困るのである。宗教の人生的價值は決して特殊の信條や儀式そのもの、普及に存するのではない。特殊の形式で習慣的に人格を縛るが爲に存するのではない。總ての人の精神を開發し、人格の自由なる暢達を助けるところに存するものであることを理解して貫はねばならぬ。宗教にして此の如き態度を具へて來れば、教育と共同して、道義涵養の事業に當ることが甚だ容易である。又之が必要であると思ふ。

第二には學科の利用である。學科に於ては先づ自然研究を更に盛んにし、特に自然の生命、神祕を指示して兒童の性情たる同情、感激、崇拜の感情を刺戟し、其の宗教的本能の開展を計らなければならぬ。次第に進んで理科博物を學ぶ際に於ても、唯之を物質機械として形態の分解教授を爲すに止めず、其の生活存在の本源乃至究竟の意義價值に對し、十分の理解と同情とを持たしめるやうにすることが肝要である。次ぎには自然研究と伴つて、信念と關係ある神話、物語、更に進んでは諸種の文學を學課の内に或は學科以外に利用して、少、青年の宗教的情操と知識とを啓發すべきである。精神力に對する驚嘆、見えざ

る世界に對する憧憬、實驗、及び推理の分析的知力以外の綜合的直觀力、幽渺深遠の境に出入する自由豐富なる想像力等を養ひ、各種の疑問に逢着せしめ、煩悶を自覺せしめ、象徴の意義を理解せしめ、あらゆる事件に依つて精神生活の門戸を開かせる用意は、此の文學的材料の利用に俟つことが多い。

第三、國祭日、其の他學校に於て行はるゝ儀式を爲し得る限り精神的に舉行する事である。儀式といふものを單純なる社會的裝飾として見る場合は兎に角、教育上の見地よりする場合に於ては、之に依つて、それ／＼學生を一種の精神的空氣の中に引き入れ、精神的意義を直感せしめ、以て敬虔にして嚴肅なる氣分の中に、日常個人生活を絶したる公明偉大なる境地を経験せしめなければならぬ。即ち儀式を以て直ちにそれ自ら目的たる最後の實在とせずして、精神的價值のシムボルとして、其の内容に徹底せしめることが必要である。

若し此の如き用意を以てすれば、既成宗教の信條儀式を用ひても、決して害はないのである。既成宗教の信條儀式の往々教育上有害であるのは、其の本質に誤謬の存するに因ることもあるであらうが、又其の之を取り扱ふ態度に誤謬の存するに因ることが屢々ある。即ち唯習慣的に形式的に信條の爲に信條を墨守し儀式の爲に施行するやうになつて、絶對の精神生活境に導

き入るべき筈の信條儀式を以て、却つて人の靈性の眼を塞ぎ、精神の自由を抑へるのである。斯ういふ態度でやれば、宗教の信條儀式のみではない、普通の學校の儀式などでも、無益にして有害なのである。

第四は音楽美術等の利用である。教會寺院に於ける音楽美術が宗教的情操を養ひ、宗教的感激を導く上に如何に重大なる役目を勤めてゐるかは説くまでもないことで、古代に於ける音楽美術の發達が主として宗教的象徴乃至表現の爲に出來た事實に依つても知ることが出来る。實に音楽美術は精神生活の材料として、其の受容及び發表の手段として甚だ重要なものである。此は學校に於て信念涵養の手段として用ひるにも適當なものであるが、歌謠、器樂、繪畫、彫刻、乃至は校舎の建築、庭園の築造に至るまで注意して、之に依つて相當の効果を擧げることが出来ると思ふ。

第五、中學校及び大學時代の青年は、漸く自覺が明らかになつて來ると共に懷疑的になつて、自己の境遇、生活、事業等に關し、種々の疑問を起し煩悶を生ずるのであるから、此の機會に於て徹底したる精神的解釋を與へ、究竟の信念に到達するやうに導かなければならぬ。之が爲には宗教哲學、藝術等の各種の材料を用ひる必要もある。舊時代の教育家のやうに、青年子

弟を一段低い者と見、其の懷疑煩悶をば一概に生意氣として、叱りつけて抑へてしまふことは甚だ宜くない。昔の書生はそれでもよかつたらうが、是からの青年は生活事情が違つてゐるから、それでは納得しない。教育家も青年子弟と同等の地位に身を置き、十分の同情と理解を以て、思想感情の奥底を叩き、共に研究して徹底したる理解を試みる態度をとらなければ、眞の教育は出來ないのである。人格的感化も斯ういふ際に於て始めて行はれる。之が爲には、教師自身研究と修養とを積んで、青年子弟の要求を満足させるだけの識見と徳力と、更にいへば十分なる確信を有してゐることを要することは勿論である。

〔教育と信念涵養〕 歸一協會例會に於ける講演

大正三年十二月

今後の婦人の生活

今後の人類生活は經濟的にも、精神的にも、一大運動を興して吾が國家生活に深大なる影響を與へ、惹いて婦人の生活に動搖を起すのは數の免れぬことである。

従來東洋の婦人は男子に養はれて行くといふことを處世の方針ともし、又理想ともして居つたのである。否寧ろ婦人が若し

經濟的要素とならねばならぬといふことは婦人自身の不幸であり、その家庭の恥辱として居つたのである。我が國の婦人は過去五十年間の社會の進歩につれて大いに覺醒する處があつて漸次其の習慣が改まつて來た。併し因襲久しい生活の標準を改めて行くといふことは容易に満足する迄に至らない。思想と實行の矛盾はいつの代にもあることではある。人間の生活は常に過度時代である。併し必ず斯うならねばならぬ、斯うなるであらう、といふ將來に來らんとする時勢の推定は現在に徹底すれば明瞭に豫知することが出来るのである。即ち今日は、婦人も生活上の經濟の要素となつて働かねばならぬやうになつて來て居る。殊に現今の日本の如き經濟狀態では、婦人が家庭の人としても、或は獨立した一個人としても大いに職業を執つて先づ自分及び一家の經濟の獨立を得ねばならぬ。如何となれば今日の經濟狀態に比較して人口は益々増加しつゝあるのである。文明の結果、衛生思想が發達して人が病死することが少くなつて來る一方には、經濟上の生活がなか／＼容易でないといふことになるのである。それ故結婚するにも經濟の要素を考へねばならなくなつた、即ち生活難、結婚難である。

これに就いて先頃の亞米利加合衆國の統計を見ると、二十歳以上の獨身婦人（未婚者及び寡婦離婚者）が殆んどその人口の

半數を占めて居るのである。その大多數は經濟上の生活難に原因して居るのである。これを又反對の方面から觀察して、若しその半數の結婚婦人が社會の寄食者であるとすれば、國家經濟上、及び婦人自身の位置は不安定の不幸を招くものであるといはねばならぬ。

この狀態は單に亞米利加合衆國のみではない、將來の日本にも必ず來るべき狀態である。殊に今回の歐洲戰爭の影響は經濟的から考へた女子の國民思想に一大刺戟を與へつゝあるのである。そして將來日本にも影響して來る事は明らかなる事實である。要するに、婦人も經濟の要素とならねばならぬ時節に到達したのである。經濟の要素となつていふことは職業的生活、自覺的生活である。さうして職業として自營するには専門教育の必要を感じる、即ち女子高等教育の必要の起る所以である。

斯くの如く一方に、經濟的生活の改善を要すると共に、又精神生活の覺醒を促して來たのである。

十九世紀文明は物質文明であつた。二十世紀に入つてもこの物質文明は益々進んで來たが其の極端なる弊害は、人類の精神生活に壓迫を與へるやうになつた。現に今回の獨逸の戰爭は、この物質文明の最高潮の戰であるかと思はれる。此の物質的生活が遂に精神生活に勝つことの出來ない教訓を残して、大いに

精神生活の復興を促した。今後の精神界の大勢は一變するであらう。

精神生活の要求は共同、一致、人道の實行、靈の覺醒である。さてこの生活の根本思想はどこから出て來るか云へば即ち精神界の革新者、靈の復興者たる今後の婦人である。

婦人は其の本質に於て情的であり、直觀的である。故に精神生活の方面には生れながらに長所を有して居る。其の故に女子が宗教的、藝術的、教育的活動に適して居ることは云ふ迄もない。從來とても女子がこの方面に目覺めてその精神的活動を開始して、宗教、藝術、教育等の各方面に顯著なる効果を現して居る。而してこの傾向は今回の大戦の結果として益々進行すべきものである。

譏つて日本の社會、及びその婦人の状態などその責任使命は重大と云はねばならぬ。外には國家の信用と威嚴を保つて世界的協同の出來得る國民とならねばならぬ。内には、未だ因襲の夢に眠つて居る東洋の婦人を牽ひて立つ責任がある。故に今後の日本婦人は精神生活を獲得すると同時に、經濟的獨立の能力を有するものでなければならぬ。その生活が獨身者と、結婚者と、家庭と、社會と、其の何れの生活に在つてもこの兩方面の完全なる資格を具備しなければならぬ。

轉じて我が國婦人の十年の過去を省みると、即ちかの日露戦争の與へた刺戟は婦人及び社會をして非常なる責任を感ぜしめた。然るに今回の歐洲戦亂の與ふる刺戟は彼の時代に優る大刺戟であることを自覺して居るものがそも幾人あるであらうか。この大刺戟に遇つて覺醒しない婦人の生活の意義は何處にあるのであらうか。大正四年は將さに斯くの如き一轉機である。

（「家庭週報」第三百號）大正四年一月

我等の覺悟

私は今年の第十二回卒業生の送別に臨みまして、唯一言、皆さんが此の一年間お盡しになつた事を感じて置きたいと思ひます。此の間も申した様に、高等女學校が幾分か自信が出來たと云ふことも、やはり大學部が出來たからで水源が高まつたから其の流れを汲むものも充實したのであります。吾々の理想は限りなきものであるから何時迄もはてがない、けれども幾分かづゝ内に育ちつゝあるものがあると云ふことを自信する事が出来るのであります。之には目に見えない處の力があることを知らなければなりません。

實は指導者の方、寮監の方が餘り忙しいといふ事なので、私

は皆さんにその忙しい理由を尋ねて見ました。其の中でいろいろ人に依つて違ひますけれども、總ての方に一番時のかゝるといふのは個人面會でありました。指導者が個人面會をして、

銘々の生活を充實させようとか、缺點を改めさせようとかするには非常なる力を要するのであります。又あなたの方にしても一人の友を善くしようとか、悔い改めさせようとか云ふには非常に力を要するのであります。故に今日の空氣を作るにはどれだけ見えない處に努力したか分らない、之をするには非常なる力と智慧と人格とがなければならぬのであります。さうして人の爲に盡すといふ事は往々誤解せらるゝことはあつても感謝せらるゝことは少ないのであります。けれども此の校の人は之を土臺と信じて自分の生命にかへてもなさねばならぬ、茲に集中しなければならぬのであります。而し之は誰の爲でもなく、誰から禮を云うて貰ふ事でもない。實は自分の爲であり、自分の捧げて居る所であります。故に其の働きをやめたら、本校卒業生たる價値はなくなるのであります。故にお互に人の働きの認め、人に感謝することが大切であります。實は學校で認めて居る處は、教授の時間に對してばかりで、個人面會をするとか寮舎を導くとか云ふ事に對しては何等の報酬をも上げてはない、けれども、之はなくてはならぬ役目であります。併し私は今後

も此の指導者について報酬を上げるとか教授と云ふ名稱を與へると云ふことはしないつもりである。何となれば之は自分から、捧げるところの働きであります。

あなた方もさうである。あなたの人格なり感化力なりは之から教育家としてお立ちになるにも家庭の主婦とおなりになるにも、誠に大切な目に見えない處の大きな賜を得ておみでになるのであります。併し世間からは認められない、當世風の考から云へばつまらぬことの様でありますが、あなた方はよく此の精神を以てお働きになつた事を感謝致します。故に私はお別れに臨んで指導者、寮監方が之が爲には何の物質的の報いをも得ずして非常にお働きになつた事、及びあなた方が其の立派な動機と精神とを以て目に見えない處にお盡しになつたことに對して深き感謝の情を禁ずることを得ず、一言其の意を表しておきたいのであります。

此の精神をお失ひなさらないならば、あなた方の將來は必ず開けて來るのであります。本當の幸福が授けられるのであるから、どうしても此の主義をお忘れなさらない様に祈ります。

今一つ今年の卒業式は、之から大學の仕事を始める始業式と致したいと思ひます。即ち大學に入る處の宣誓式と致したい、之は私が強ひるのではなく、自由教育であります。今朝各學部

から代表者がお出でになつて其の式は先生を通して何かに誓ふのであらうか、又は私共が直接何かに對して誓ふのであらうかとの御尋ねでありましたが、此處にキリストがおおみでになります、又此處には不動様が御みでに成ります、又茲に孔子もマホメットもおおみでになります。其の他誰々もあつて之等は…… Chancellorである、もう一つ之等の人の教へを受けたところの President がある。其の總長に向つて私共は誓ひを立てるのである。夫れが今日の宣誓式であります。私共は之からどう云ふ生活をするのであるかと云ふと、私共は先づ其の師弟の關係を結んで其の先生に従ふことが大切であります。茲に私はあなた方の御参考にと思つて埃及の繪をかけて置きました。此の繪は即ちイスラエルの民が埃及の奴隸となつて使はれて居る處で、其の時の大きな建築は皆奴隸を使ふたのであります。

パレスティンに歸る前にイスラエルの民は奴隸となり、其の後沙漠をさまようて漸うパレスティンに来て、それから自由教育を受けたのであります。あのイスラエルが奴隸となつて働いて、其の後彼等によつて産み出だされた文明の跡を御覽になると、神は如何に人類を教育なさつたかと云ふ事が分ります。故に吾々の總長は天にあるのであります。

神は人類を導くに嚴父の如く慈母の如き愛を以て非常なる苦

しみを與へて後に非常なる發展を遂げしめられたのであります。あなた方日本の女子は今奴隸の如く使はれて餘儀なくされて居ます。故にあなた方は之から非常なる困苦と戦はねばならぬと覺悟すべきであります。其の時に此の繪を覺えて居つて欲しい。之はキリストとポーロであります。キリストがポーロの將さに海に沈まんとする處を救うておいでになる、困難は海である。此の時ポーロは『義人は信仰によりて生く』と申しました。若し信仰を失ふならば其の時から海に溺れるのであります。此の方は不動様である。之等の方のお一人でもよい、お二人でもよい、もつと澤山でもよい、此等の先生に御相談になればあなたがたの境遇に應じ必ず必要な教訓を與へて下さるのであります。

もう一つはベスタロッヂ先生であります。之から先生になつても、家庭に入つても、子供にならねばならぬ。私共が人を導かうと思ふならば其の人と共に働かねばならぬ。ベスタロッヂ先生は子供の中に入つて子供と共に働かれた。けれども生涯失敗ばかりせられたのであります。私共も何時も失敗するけれどもやめられない。あなた方も失敗するであらうけれども、其の價値は死んで認めらるゝに至るのであります。あなた方がさういふことに就いて煩悶を持つた時にはベスタロッヂ先生に相談

して下さい。

それからあなた方の中には身體の弱い人もある。目のわるい人もある。けれども彼處にヘレンケラーが居ります。ヘレンケラーは目も見えず耳も聞こえず口もきけない、五官の中で觸覺一つしかないけれども、大學を卒業してどん／＼著述をしました。私は此の人に面會して其の要領を得るに敏捷な事に驚きました。セントフランシスは生涯人のために盡して最後には土の上で喜んで死にました。西洋の大學では初めには語學を教へますが、卒業の頃には哲學をやらせます。どうしても哲學をしなければならぬ。夫れにはエマーソンがゐます、又デモステネスがゐます。デモステネスは海岸に立つて浪の音と競争して聲の訓練をして居ります。斯う云ふ大哲學者又は能辯の大先生についてもう一つ深く研究を積まねばなりません。

それからもう一つは大學には専門教育があつて、選擇的です。私共はどうしても何かの専門に深くならねばならぬ。其の先生にはコペルニカスが居ります。斯くの如き先生に就いて科學を専攻し、發明も出來る人とならねばなりません。我が國の婦人の缺點は、原因を研究し、原理を發明し、之を應用する方法を發明する力が乏しいのである。之が缺點であります。故に今後あなた方は此の點をも充實せねばならぬのであります。

す。

以上の目的を遂げんが爲に、吾々は茲に目に見えぬユニヴァーシティーを組織し、教授を選定して之から眞の大學教育をしようとして云ふのであります。其の上には大なる總長が居るのであります。それであなた方が之から身は四方に散ずるも、心は互に結合して、此の大學に集中して努力奮闘するならば何事も成らざることはありません。今や此の入門の宣誓式をしようとして云ふのであります。是があなた方の卒業式であります。此の事に對して私はあなた方からの答辭を聞きたいのであります。

〔花紅葉〕第十四號・第十二回卒業生送別會に於て

大正四年三月

我等は神明に誓はむ

本校創立以來十四年間一日の如く此の女子教育の根柢を育てんが爲に深い同情を以て、培ひ水を注いで下さつた評議員の方々、殊に既に古稀の峠をお越えになつて猶青年の元氣に満ちて日夜國家の爲にお盡瘁になつて居られる御三翁が、お揃ひ下さいました此の式場に於て、又あなた方を日夜熏陶された教職員、寮監、指導者、又本校に深き同情を寄せられた方々、並び

に父兄保證人、來賓諸君の御面前で此の喜ばしい卒業式を擧げることの出來ますのは、我々一同の深く感謝致すところであります。

今日の式は既にあなた方が決心をなさつた通りに、今後の大學にお進みになる入學宣誓式であります。又過日來あなた方の間に心と心と結び合せ、一心同體となつて御受けに成つた今後の使命に對し、至誠以て神明に誓ひ覺悟をおきめになる最も意味深い卒業式であります。

一昨夜既に其の決心を互に交換なさつた會は十分に徹底したのであります。今日は其の要點を茲に列擧致しまして來賓紳士淑女の前に宣誓の意義精神を明らかにし、最後の感銘を公に刻み度いと思ひます。故に卒業生諸子は今起立して其の意を表すことに致します。

一、我等は使命の爲に奉仕するの決心を致します。

一、我等は家庭の神聖を保つ事を覺悟致します。

一、我等の確信する主義信仰は何物にも曲げず、或は賣るが如き行爲は決して致しません。又我等の子孫をして必ず正義に與し、如何なる情實にも屈する事なく、君に忠、國を愛する立憲的國民たらしむることに努めます。

一、我等は教育を受けたる責任を全うせんがためには如何な

る犠牲をも敢へてし、一步も退かぬ覺悟を定めます。

一、我等は時と處と各種の事情習慣とを超越して、只管心と心とを以て相敬愛し、相共働して人間最高の目的のために盡瘁致します。

一、我等は己のために、人のために御國のために世界のために煩悶に勝ち、障害に勝ち、偏見に勝ち、劣情に勝ち、勇氣と犠牲と希望と喜びと自由と克己とを以て努力せんことを祈り、今後の世界の大勢を正道に進ましめ、益々世界の良心宇宙の心靈の體現せんことを日夜祈ることに致します。

一、吾が國婦人の使命を全うするために我等は今後の歐米婦人の進歩に遅れを取らず、步調を揃へて共に人類の安寧幸福を進むることの出来る様に常に常識を養ひ、研究を積み、修養を進め、一日も各自の發展を怠らぬことを誓ひます。

右七ヶ條の誓言を深く心に刻み、茲に敬虔の態度を以て必ず爲す、必ず成るの決心と確信とを以て神明に誓ひを致します。

〔花紅葉〕第十四號・第十二回卒業式告辭 大正四年三月

